1984

京城雜筆

永樂町人 編輯

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年一月一日發行（毎月一回一日發行）

正月號

〔第八十三號〕

金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）
金剛おこし
金剛しるこ

金剛煎餅
金剛山
金剛羊羹
金剛饅頭

京城本町二丁目
電話二十七番
本局四七五番
龜屋商店

官製食卓鹽
電機諸機械
コンヂットチユーブ
ラヂオ

御用の
は店幣
命下御へ
すま上願

京城南大門通三丁目
富田商會
長電本三三〇九

冬向背廣服
同オーバ
レインコート
新地質續々着荷
仕立念入り價格は安い
經濟的理想の既製品頗る豐富
▲御注文に應じ特製仕候
京城鍾路一ノ一九
角田洋服店
電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

樂器と蓄音器

獨乙高級ピアノ
山葉ピアノ、オルガン
鈴木製
ヴアイオリン、マンドリン
獨乙製
ウアイオリン、マントリン
內外管樂器一切
內外蓄音器
內外レコード（日蓄、日東、內外ウインナー）
內外音樂書
樂器附屬品一切
運動具一式
（目錄無料進呈）

京城本町二丁目二十九

釘本洋樂器店

電話一二八三番

朝鮮讀本（新刊定價五十錢）

民族讀本（新刊定價五十錢）

發行所 大陸通信社
電話本局一九九番

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競爭をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用
陸軍衞戍病院御用
京城府內各病院御用

平山牧場

電話光化門一三三番
京城東小門外

正月號目次

（原稿は大體到着順に出る）

お牧の茶屋……李王職次官　篠田治策氏
李朝時代の大懸幅……遞信局監理所長　松島惇氏
新年所感……漢城銀行頭取　韓相龍氏
黃海道龍淵の傳說……朝鮮鐵道常務　伊藤利三郎氏
話下手……朝鮮火災海上保險　河內山樂三氏
堯舜不死大盜不止……京城第二高普　平山正氏
年始狀……朝鮮銀行　岸嚴氏
秋の感じ……京城電氣會社　見目德太氏
閑話二題……寺尾猛三郎氏
野人語……岡村介石氏
洋畫界の諸傾向……京城第二高普　山田新一氏
十五年……遞信局事務官　堂本貞一氏
感想一つ……木戸齒科病院　木戸虎藏氏
拈華微笑……今村鞆氏
新年への考察……大阪朝日支局長　井上收氏
懷舊……總督府囑託　松田學鵬氏
菊寒し（俳句）……殖產銀行　森悟一氏
夫婦の說……警官講習所長　武井秀吉氏
東京棋信……將棋七段　蒔呂木光治氏
思ひついたまゝ……京城日報主筆　丸山幹治氏
舊知の書信を寫して……釜山日報社長　芥川正氏
南滿北滿の旅……木浦　福田有造氏
御挨拶……京畿道廳　時實秋穗氏
續和順雜記……總督府燃料研究所　市村毅氏
通俗講話……遞信局技師　津田常男氏
正月と旅行……淺川伯教氏
南洲禮讚……吉田直氏
上古の朝鮮神宮……朝鮮鐵道協會　岩本善文氏
野球の興業化……總督府鐵道局　林原憲貞氏
青蛙……總督府法務局　土居寬申氏
元日氣焰……廣江澤次郎氏
京城七不思議……日出商業補習學校　大山一夫氏
よろこび（短歌）……京城師範學校　赤木萬二郎氏
千萬人と雖我れ行かむ……殖產銀行　中島司氏
柿右衞門の事……京城現物取引市場　中村郁一氏
開題目……永樂町人

お牧の茶屋

篠田治策

平壤の牡丹臺下にお牧の茶屋がある。牡丹臺のお牧の茶屋といへば、朝鮮内にて知らぬ者は無いほど、平壤名物の一になつた。内地よりの觀光の客も、牡丹臺の風景を觀る者は、多くは此處に立寄るを例とする。お牧の茶屋が斯くの如く有名になつたのは、勿論其場所が風光明媚であるからでもあるが、嘗て十數年前に、高濱虛子氏が此地に遊び、其流暢麗麗なる筆を以て、之を江湖に紹介したからであつた。虛子氏の筆により、お牧さんの名を知る者は、種々の想像を畫いて、お牧の茶屋に立寄りお牧さんを見んとする。されどもそれらしき人は何時まで待つても遂に出て來ぬのである。是に於て短刀直入に、お牧さんを見せて呉れと頼む人も中々多い。

『お牧は生憎今日は、町の方へ買物に出かけて留守です。知る邊にも立寄る筈ですから、歸りは中々手間取るでしよう』

本物のお牧さんが、毎にかくの如くに答へねばならぬことほど、左樣にお牧さんも、既に年寄つたが今も尙ほ愛嬌良くお客さんを接待して居る。

お牧さん夫婦が、此地にさゝやかなる茶店を出したのは、二十餘年前であつた。其頃のお牧さんは、虛子氏の言ふまでも無く、萬綠叢中の紅一點であつたであらう。當時牡丹臺には道らしき道も無く、牡丹臺見物は殆ど一日仕事であつた。殊に江岸の通路の如きは、滿潮時には交通不能となり、干潮時にも巖角を攀ぢて、辛ふじて通行し得る程であつた。お牧さん夫婦は、かゝる交通不便にして、夜間は勿論、秋冬の頃には、殆ど訪ふ人も無き、此場所に共稼ぎの屋臺店を出したのである。晝間の僅かなお茶代を覘つた强盜に押入られて主人が斬られたのも其頃であつた。氣丈夫なる夫婦は、夫れにも屈せず、寂しさと苦しさを凌いで時節の到來を待つたのだ。

齋藤總督が海軍大臣たりし頃、寺洞の炭鑛視察の爲め平壤に來られ、松永長官の案内で、お牧の茶屋に立寄られたことがある。私は旅行中にて不在であつたが、松永長官の談によれば、其日は餘程寒き日であつたが、見すぼらしき葭簀張の小屋の内で、平壤肉のすき燒に熱つ燗と、お牧さんの愛嬌良き接待とで、お客さんも大に滿足せられた由であつた。これが例となつて、貴顯紳士のお客さんでも時時お牧の茶屋に案内することとなり、遂には必ず案内せざるを得ぬようになつた。是に於て、誰れ言ふとなく、平壤の爲めに、多少ふさわしき座敷もかなと、遂に敷地を貸與し、夫婦に勸めて、金主を求めて現在の座敷を新築せしめたのであつた。

〔二〕

其後、牡丹臺は平壤府の公園となり、交通の便も開けて、杖を曳く者四時絶へざるに至り、老夫婦多年の辛苦經營も、酬ひらるる時は來たのである。私は嘗て平壤に在住せること十三年、朝な夕なに牡丹臺に來賓を案内したこと、幾百回なるを知らぬが。先き頃、樂浪の遺跡を視るべく懷かしき平壤に到り、昨の案内者は、今は案内せらるる身となつて、懷ひ出多きお牧の茶屋に招待せられたのである。綾羅島、錦繡山、依然として昔を語り、酒餞、大醉島のわたり、秋色殊に深く、大同江は亦溶々たる水を湛へて、其縱の眺めは、例によりて厭くことを知らぬ景色である。私は再び此大觀に接して、舊知の人々と語り、言ひ知れぬ嬉さを感じた。而して其夜の汽車にて京城に歸つたが、お牧さん夫婦も夜半過ぎに、はる〳〵停車場まで見送つて呉れた。去る者は日に疎く、人情紙よりも薄き今日此頃老夫婦の義理固きには、一しほ感謝せざるを得なかつた。

◈筆のしづく

吉田莊一

平壤は、人情の險惡なところで、曾てそこに官たりし人で、同地をほめるものは、殆んどないといつていゝ位▲しかるに李王職の篠田次官だけは同地を第二の故郷のやうにし、タマに出遊するのを、非常な樂みにして居る▲ところが、平壤の方でも、次官だけは特別扱ひ、行くと誰れも彼れも大喜び、呉越同舟で、歡迎會を開く▲『篠田さんが見へた』一日で町中にひろがるから面白い。

中の紅一點であつたであらう。當を求めて現在の座敷を新築せしめろがるから面白い。

京城雜筆

李朝時代の大懸幅

松島惇

私は昨年の春、百濟の舊都扶餘に旅行した時、同地を去る約七里扶餘郡外山面と云ふ處に、萬壽山無量寺と云ふお寺がある、其のお寺に非常に大なる懸幅のあることを扶餘の有志者より聞き、私の考古癖止み難く同寺を訪問することにした、此の寺は百濟時代に置かれたと云ふことである、今日現存して居る文獻には、百濟時代にそういふお寺が建立されたと云ふことは見當らず、又其の寺にも何等の記錄がないのであるが、大雄殿の前に、扶餘平百濟塔と同一の形式に屬する釋迦塔一基があるからこれに依つて百濟時代の寺であることが證明できる、同寺の大雄殿の内に、幅曲尺廿五尺、長さ曲尺四十五尺の大懸幅があるのであるあまりに宏大なる爲め、堂内にては懸ける場合もなければ、全部廣げて觀ることも出來ないので、村の百姓を呼びにやり、六人掛りで本堂の一段高き處より下して、上の方より順次卷きながら一部分宛づ觀るのである、之は彌勒菩薩の立像が描かれたもので、金泥、朱紺、青綠等にて極彩色を施し、其の筆力の雄渾偉麗なる、未だ嘗て見ざる大傑作である、其の幅の末尾に左の文章が記載されてある。

聖壽天長邦地基久宗風不斷佛日
永明法界含靈了心成佛耳
施主秩
波湯施主長祿而主保體
波湯大施主金希春兩主
……
畫員秩
法問
慧允
仁學
熙尚
時維天啓七年丁卯六月日畫成畢
也鴻山縣地北嶺萬壽山無量寺彌
勒掛幀一會留傳也

右に依れば、此の繪畫は天啓七年六月に描き終つたと云ふから、今から三百年前（西紀一六二七年）の製作に係るもので、丁度李朝仁祖五年に相當する、我が邦にては後水尾天皇寛永四年で、德川家光（三代將軍）の時代である、其の筆者は當時僧侶にして畫員たる法問、慧允、仁學、熙尚の四人の合作であることがわかる、私の同行者が此の繪畫を部分的に寫眞機にて撮影し、後ち京城に持ち歸り、現象せしめた所、寫眞屋の不注意にや、光線入りたる爲め、總て不明に歸したのは、洵に遺憾である

寺の僧さんの談に依れば、此の彌勒菩薩の懸幅は、私の外扶餘郡の郡長に見せた位で、其の他は唯だ旱魃の際雨乞の爲めか、又は年に一度のお寺の祭の時に、大なる足場を組立てゝ、之を懸けるのみだと言つて居る。

現今日本内地は勿論、支那にても恐らく斯の如き大作にして、今尚保存されたものは無からうと思ふ、試みに此の繪畫を描いた當時の事を追想するに、此の繼ぎ目なき幅約二十尺の切地か、如何にして織出されたか、又幅二十五尺即ち四間一尺長さ四十五尺即ち七間三尺のこの大作を描く畫室は、如何に宏大なりしか、又この繪畫を裝幀するに、如何なる方法を用ゐしか、現代人の想像だも及ばざる所である、この天下唯一無二の珍品が、今日迄殆ど世に紹介されないのは、誠に遺憾の極みである、斯の如き寶物は宜しく政府に於いて、國寶として永久保存すべきものであるのに、今日まで放棄されてゐるのは、當局者の注意の足らざるによることゝ思はるゝが、若し經費の關係上實行不可能なりとせば、一般國民より醵金してでも此の世界的寶物は、一日も速に保存の方法を研究すべきである。

◈せちから記

平田久雄

いろ〳〵な出版物が出來るのは、いゝとして、それを押しつけられる範圍――階級は、おのづから一定してゐるので、人々は、またかと眉をしかめて居る▲とは言ふものゝ、中には可なりマジメなのもある▲例へば、釋尾氏の併合十五年史の如き正に三年心血を注いだものである▲處が、偶然といはうか、朝鮮毎日社が、昨年からやつて居るのも、同じ十五年史、しかもこの方は、昨年秋全鮮に渡つてもう豫約濟となつて居る、仲々拔け目がない▲世相のセチ辛さ、こゝでも窺はれる。

京城雜筆

新年所感

韓相龍

曆日茲に改つて芽出度丙寅の新春を迎へた、常年は寅に因んで威勢を副へ、總てが活氣を呈しそうな年柄なので、同時に實際その調子が現はれて、財界の狀態は既往に比して頗る改善の跡を示して居る。

振り返つて見れば昨夏の水害は京城を中心として漢江及洛東江流域に暴威を逞ふし、前古未曾有の慘狀であつた、當時吾人は之れが復舊の容易ならざるを思ひ、朝鮮財界に及ぼす影響が深刻であらうと頗る憂慮した次第であつたが、官民協同、最善の努力に依つて其後復舊事業も著々進捗し、殊に稻作は秋季に入り天候適順であつたため被害地を除いて他の各地方は出來榮へ非常に好かつたので、總產額の上に於ては前年より却て增收を見るに到つたことは甚だ欣ぶべきことである、從つて出穀旺盛となり且つ價格も相當程度を維持して居り、其の外蠶繭の增收、棉花の收穫等彼是で農家の經濟は宜敷く自然て購買力も進み次で土地熱さへも稍や擡頭の傾向である。

想へば產業第一主義を提唱せられたる故下岡總監の朝鮮在任は一年有餘で短かしとする處であるが總督を補佐して鋭意各般の施設に當り殊に遠大なる經綸の下に立策して產米增殖の計畫、治山治水の事業、或は運輸交通の整備等斯土百年の大計畫を圖てられた、而して其消業は正に實現の曉に達し、功績の沒すべからざるものが多い之れに依つて將來半島國運の隆昌は期して待たるゝのである。

今や財界は變態的狀態を脫し順調なる經過を辿つて漸次常態に復歸しつゝある、其理由は帝國貿易の趨勢が前年に比して頗る改善を示し對外爲替は恢復の域に進み而して金融界の狀態も一昨年下半期頃より漸次緩和に向ひ昨年四月、日銀の金利引下を見て一般金利の引下を助成し、公債、社債等の發行を容易ならしめたので事業界、商業界に活氣を與へ且つ海外事情の好轉に伴つて財界の前途に光明を認め得るやうになつたと謂はれて居る。而して又地方經濟に於ても內鮮何れも同樣に頗か高く賣れて米は豆作其他の農作物も概ね好成績であると云ふことであるから自然貯蓄も殖へて居る譯である、其貯蓄が地方產業の振興に資すべきものであらねばならぬ、斯の如く觀察し來れば特殊の事象が突發したならば格別だが左もなければ財界の前途は徐ろに景氣恢復すべく認めらるゝのである。

◈ゴルフ雜記

光熙散人

◎昨年下半季のゴルフ界を眺めて見ると、どうやら京電萬歲といふところに、落ちついたらしい。

◎武者さんも、中屋さんも、成績拔群で、果ては內輪同士で、最後の勝を爭ふなど、何としても京電全盛といはねばならぬ。

◎武者さんは、學生時代テニスの選手として、一代のファンを唸らせた大選手である。同じ頭で、ゴルフに向ふのだから、この方でも一流どこに、名を列ぬべきは、當然であらう。

◎驚いたのは、中屋さんだ。何としても運動の猛者とは見へないが、樂々として、好成績を收めて居る。矢張り腦味噌が上等なのであらう。

◎初陣の功名で、宇頂天になつてゐるのは、天日さんだ。近ごろ盛んに『ゴルフの德に就いて』を講演して居る。天日さんの勸誘で山口、古城、釘本、荒井といつた方面を、おびき出せないものか。

◎總督カップと、別れて、頓に世の無常を感じた飯泉さん、爾來氣勢振はず、度々の戰に、どうも成績が振はない。どうも勝負事といふものは、そんなもので、賽の目が一ッ惡く出ると、あとは幾らやつても〳〵惡いものださうな。

◎或人、あの『泣いて總督カップと別るゝの記』を讀んで、これは英雄の文だ、大作家の筆だ、恐らく飯泉君のゴルフの技も、これほどにはあるまい。も一ッ言ふと氏などは、銀行家などにならず、文筆生活にはいつてゐたら、とつくに大家とか何とかいはれたらう兎に角素破らしい筆力だね……」と。

◎飯泉さん、以て如何となす。

黄海道龍淵の傳說

伊藤利三郎

ことし秋の半、私は黄海道へ旅行をした。

長淵郡長淵附近の龍淵といふ處に、方七八十間許りの池がある、土地の名の龍淵は即ちその池の名に因みて付られたもので、深い處は八十五六尺もあり、由來底知らずとまで唱へられて居るさうだ。

周圍は小高い岡で、池の餘水は南方截り立た屏風岩の根を潛つて泉の如く湧き出で、更に小川となり、附近の低地數百町歩を灌漑して居るとの事である。

岡の中腹に在る水車小屋では、落差を利用して精米をして居る、池の北岡へかけての五六十戸の部落は、時節柄秋の取入れに忙しい

案内の人から色々地方の情話を聞いたが、此の龍淵に就ての傳說も神秘的におもしろい所から、茲にその荒まらしを書き綴ることにした。

昔此の池の滑りに、呂氏といふ弓の名人が住んで居た、至つて正直ではあるが家貧なるため、獵をしてわづかに其日の暮しを支へて居た、或る夜のことである、嘗て見たことの無い程氣高い美人が、物思はしげにその池の邊を徘徊して居つたが、遂にサメ〳〵と鳴咽するのであつた。

呂氏は不審に思ひ乍ら、傍に寄つてその仔細を聞いて見ると、その美人は告げた。

此處から程遠からぬ東の山へ、近頃神變不思議な力を有つた大蛇が現はれて、あたりに威勢を振ひ、近く自分をも襲はんとして居る、けれども不幸にして自分には、到底も勝目が無い、此のまゝにしてあれば、自分は殘念ながら此の池を去らなければならぬ、實はそれを悲んで居る美人は即ち此池の主であつたのだ呂氏は氣の毒に思つて、必らずその災厄を攘ひ得さすべき旨を誓つた、スルト池の主は大に喜んで、明日の正午を期して自分が池の央から頭を現はすとき、山の大蛇も本體を見せて直に自分に飛び掛らんとするであらう、その時覘を定めて大蛇の天邊を射通し呉れ……と言ひ訖るかと思へば、美人は跡見返りつゝ淵にうるはしい姿を沒した。

呂氏はその跡を逐はんとして、フト目を覺すと唯だ孤燈の影かすかにして、屋外は悽風颯々たるのみであつた。

翌日呂氏は約に違はず、とある岩陰に身を隱して、今や遅しと待つて居つた、やがて一天急に墨を流したように暗くなつて、一陣の暘氣、瀁ふと覺ゆる折しも、電光はためき、おどろ〳〵しき雷鳴、暫しもやまず、豫て期したる龍淵の中央から、書に見るやうな青龍が頭を擡るのを認めた。

トほとんど同し頃ほひ、東の山の彼方に、見るから怖ろしき形相の、大蛇が火焰を吐きつゝ現はれた、ユコぞとばかり呂氏は覘ひ定めて、骨も通れと力を籠めて射放つた。

覘ひあやまたず大蛇の天盃を射拔いたが、天地にわかに晦冥となつて、轟々の聲は山野を震動したサスガの呂氏も、前後を忘れ身を慄せて居つた、凡そ三ときがほど過ぎたと思ふ頃、呂氏は村の人々に助けられて、無事に我が家に歸ることを得た。

其夜呂氏の枕邊に、曩きの夜の美人が現はれ、嬉し氣な晴々した顏をして、呂氏の勞を謝し併せて其恩に酬ふべく、此の池の水に依つて呂氏の子孫が、長く榮えることゝなるであらうと告げて、忽ち姿は消へ失せた。

翌朝呂氏は何氣なく南の山の麓を見ると、不思議にも池の水は岩根を潛つて此處に恰も泉のやうに流れ出で、一夜の中に小川となつて、附近の畑はその年より水田と化し、黄金の花をつけるやうになつた、爾來盛夏の候にも滿ち湛へて、涸渴したことがなく、常に滾々と盡きず流れて、長く呂氏の家を賑はし、今尚ほその子孫は恩惠に浴して居るさうである。

◈人さまざま

吉田莊一

商銀の古宇田さん、むつかし屋だといふものもあるが、會つて見ると、仲々さつぱりして居る『僕もその内何か書きますよ、君ッ達の仕事も仲々骨だね』……とまアと言つたやうな調子、むつかし屋處か、頗るよく解つたものだ。

話下手

河内山樂三

川尻君が、またやつて來た、この前に來た時には次の雜筆誌上に、拙者に關しほめたのやらくさしたのやら分らぬやうなことを、書いて居つた、僕は元來朴訥である、其の日も全くお上手なしに、率直に應對したのであるが、君の告白によれば、其の時は君がまだ駈出の記者であつたと云ふことであるから、僕が無愛嬌な面付で、ブッキラボーに挨拶するのを見て、なにか手管でもあるやうに感違ひしたのであらう、無理もないことである、イヤ或は滾路態々訪ねて來て、何か書いて呉れよとの依頼を、無下に斷つたから、少しはむかつ腹の氣味か、手傳つたのかも知らぬ、それだから今日は、他所行のつもりで、努めてやさしい顔をした上、讀はれるまゝに、何か書くことがあつたら、書いて上げやうと、すなほに安請合したところが、君はさも滿足したらしい面地で、亦多くを語らず、折角酌んだ茶も飲まずに、あたふた歸つてしまつた、サテ先生今日は何と感じただらう、思へば可笑しくなる。

それにしても吾輩は、なぜこんなに話下手なのだらうか、恐らく趣味が狹いのと、文字が少ないのに基因するのででもあらう、もし趣味が廣かつたら、話題は滾々と盡きる所を知るまいし、また文字が多かつたら、形容澤山に面白可笑しう辯じ立てて、市井の一些事でもさも一大事らしう、聽者を引き付けて、あかず傾聽せしめることが出來るであらう、まことに羨しい次第である、しかし餘り上手になると、話が得て岐路に這入つては又元に歸り、行きつ戻りつナカナカ捗らないばかりでなく、要領をつかむのに、困難な場合がないでもない、勿論時には聽者に要領を得させぬやうに、わざと廻りくどく話すこともあらう、これは別問題であるが、とかく餘り辯にまかすと、時には興太を飛ばすやうに思はれたりまたは駄法螺を吹くやうに、さげすまれたりする場合も少なくはあるまい。

僕等のやうな話下手は、聞上手に出會はすと、全く助かるのである、聞上手となると、丁度もつれた糸をほぐすやうに、それからそれへと、話の小口を引出して呉れるので、いかな話下手でも、ツイつりこまれて、喋り出すのであるが、もしこれが反對に、聞下手がお出なすつて何か聞かれるとなると、まことにあつけないこと夥しい、君の趣味は何か、書畫か、ノー、骨董か、ノー、圍碁か將棋か、ノーノー、玉か野球か庭球か、それとも此頃流行のゴルフか（ゴルフの上に、此頃流行の……丈でも付けば上出來の部か）、と問はれると、ノーノーノーと答へるばかりで、お巡さんが戸口調査に來た時よりも、もつと迅速に片付いてしまう、それでもこれ丈要領を得れば澤山だが、ノーノーでは餘り自慢するにも當らない。

何はともあれ、話下手には新聞雜誌の記者諸君に面會するのが、苦勞の一つだ、ぢやと云ふて面會せねばおこられるし、メンタルテストを受ける度毎に、何となくクスグッタい氣がする

◈繁劇第一人

石川利夫

警務局の田中高等課長、いつ行つても、氣の毒なほど多忙▲次から次へ、ひッ切りなしの來客▲しかも、それ〳〵難題ばかりを持込んで行く▲あれが神經質の人間なら、二三ヶ月でぶッ倒れてしまう▲體格もいゝが、應待もテキハキして居る、大底即決主義で、グス〳〵考へてゐないから、からだが持てるのだ。

堯舜不死大盜不止

平山　正

韓退之の原道は、文章軌範中の大文字である。其中に老子を攻撃して『今其言曰堯舜不死大盜不止。剖斗折衡而民不爭。嗚呼其亦不思而已矣』と云つて居る。堯舜不死大盜不止云々は莊子にある句である。莊子は老子を祖述する故、韓退之は之を引いて老子を攻撃したものと見える。堯舜は聖人の首位に居り仁義道德の鼻祖である。堯舜が死んで後に盜賊の親分が亡くなるとは何だか雲を摑む樣な話で餘り荒唐不稽で。韓退之の攻撃は當然過ぎる程當然である。然し考え樣に由つては是も亦一の眞理があつて。或は後世人士に對する頂門の一針ではあるまいか何故といふに後世仁義の名を假る者が多く仁義の實を行ふ者が少いからである。支那の簒奪者は大抵言を聖賢に托して居る。西漢の王莽の如きは運命の傾いた時までも、尙孔子の口眞似をして『天生德於予。漢兵其如予何』とまで云つて居る。之を考ふれば仁義の名を假る者が多ければ多いほど、仁義の鼻祖たる堯舜は却つて罪を作ることが多いのである。

政治上の實例を擧ぐれば、宋の王安石は朝に立つて靑苗の法を行つた。靑苗の法は春播秋の時に農民に金を貸し、秋收穫の時其債を償はしむるのである。此の如くすれば政府は無用の財を蓄ふる手數なく、人民は資金の乏しき憂なく、官民兩方の幸福であると說いた。成る程之は便利であり仁義の政の樣である然し政府の命令を以て不急の資本を人民に貸與し、之に利子を附して返納せしめ、人民が少しく期限に後るゝときは、法令を以て其財產を沒收するとなれば是は政權を以て高利貸を營むことになるので、莊子の所謂大盜の部類ではあるまいか。

韓退之が正々堂々と老佛を排斥して聖人の道を高唱した事は實に痛快であるが、一面莊子の言を味ふ時は、又大に吾人に敎訓を與ふる者がある樣である。蘇東坡は流石に苦勞人だけあつて『尊孔子者無如莊子』と云つて居る。則ち韓退之は正言を以て之を論じ莊子は寓言を以て之を述べたので、つまり其揆を一にして居るのであらう。

現今我國にも名を慈善事業に托して私腹を肥す者がないであらうか。身を敎職に奉じて他の子を賊ふ者がないであらうか。知らざる事は是非もないが、知つて尙行ふとすれば、韓退之の罪人であり又莊子の罪人である

◈頰杖ついて

平田久雄

◎明治町の中島貞信先生、謠はその道で、有名なものになつて居る。

◎その外、お好きなのは、和歌である。今年の勅題に因んだもの、

さし昇る初日の影を浮べつゝ
たゝえて淸き川の水かな

千鳥と題して、

ぬば玉の闇を川邊に啼く千鳥
親やよぶらむ子や鵰ふらむ

これは、先生には極内々で、素ッ破抜いて置く。

◎自由討究社の細井肇氏、京釜線で、木浦の木村健夫氏（富豪）と懇意になる。但しどこの百姓おやぢか知らんと、内々思つてゐたこと、に正鵠違なし。

◎釜山に著いて、同じ宿に泊り、女中に『あの老人は？』と訊くと『あれは大金持、木浦の木村さんよ』とある。そこで、細井氏晩餐の時『ヤレ、木村さん、あんたは大資本家さうぢやネ』大上段から、ばつさり一本これには木村氏も『ウ、ウ、ウ……』

◎木村氏禪を好む、木浦地方では、一風變つた實業家。

年始狀

岸巖

〔八〕

◇私は生來のなまけ者で、何か口實がありさへすれば、なるべく仕事を避けようとし、或は延ばさうとする。其の口實は世間に通用するものでなくても、自分の心持だけに一應の言譯がつきさへすればそれで滿足して、『まあ無理にやらんでもいゝ』とか『なに今でなくてもいゝ』とか、云ふ風に片付けてしまふ。

◇そこで年始狀だが、なまける方から云へば、一切やめてしまへば一番いゝので、また其の口實もあるのだが、なまけ者の癖に神經質で、それに新年にはいろ〳〵勿體をつけてめでたさを深めようといふ氣もあるので、斷然やめやうとは、きめてしまへない。そこでなるべく後廻しにしようとする口實を考へる。

◇多くの人々、いや年始狀を出す程の人の殆んど凡ては、年内に書いてしまつて、郵便局の指定期日内に出して居る樣である。實際其の方が、遞信事務の處理にも便利だし、受取る方にして見ても、元日の朝早々から、どさりと年始狀が配られるのも景氣がいいし、其晩明るい灯の下で、久しく會はなかつた友達の面影などを思ひ浮べながら、『誰さんからは子供と連名で來てるぜ』などと家内に告げたりして、一枚一枚讀んで行くのも、まことに春らしい興の一つなのである。

◇ところが私のなまけ癖が口實を設ける。『一體新年の挨拶といふものは、一夜明けて、初日を拜んで、ほんとうにめでたい氣分になつてから申し交はさるべきものだ。元日は家族同志の祝ひやら、近い處の禮廻りやらで、年始狀にまで手が廻らぬと云ふなら、二日になつても三日になつても仕方がないが、斷じて年内に借金の遣繰を氣遣ひながら、『謹賀新年』などと書きなぐるべきものではない』。

◇この邊から、そろ〳〵口實本來の使命を忘れて、騎虎の勢になる。『一體、お互ひに顏を合せてこそ、たゞ『おめでたう』の一語を交しただけでも新春の和氣が湧くのであるが、淡方の友へ、年に一度の賀狀を送るのに、色も香もなく『謹賀新年』とだけ、しかも活字で片付けてしまふと云ふのは餘りに心ない。だから虛禮だなぞと云ふ議論も起るのだ。自分は、ほんとうに新年になつてから、自分の心持を書いたものを、さうだ俳句がいゝ、新春劈頭に得た俳句を書き送らう。待てよ、一々書くのは矢張面倒だが、自分の氣持を表はした句なら、活字でもまあいゝだらう』

◇右の次第で、自分の氣持を誤魔化して年内を過してしまう。愈〻元日になる。ちやんと始めから豫防線を張つて置いた如く、年始狀には手が廻らぬ。二日も、三日も、呑むことやら、呑み過ぎの苦しさやらで暮らして了ふ。『なに松の内にやればいゝさ』と云ふことになる。やがて『どうもまだ句を得ない、正月中にやつたらいゝだらう』と云ふので、それならまだ〳〵間がある、急ぐ必要はないと、矢張延ばす算段をする。

◇大正十四年には、正月中に句が出來ないので、時には氣に懸けつゝ、時には忘れて、其の月を過してしまつた。そこで諦めるとよかつたのだが、『なに新年に限つたことはない、年に一度のたよりなんだから、全然やめるのも氣が濟まない、紀元節に作つた句を送らう』と未練を殘した。

◇紀元節にやつと『その日の山河の輝きをまのあたり』といふ句を得た。いや無理に作つた。自分のほんとうの氣持を表はしたものかどうか甚だ疑はしい。がまあ、兎に角それを印刷させることにした。ところが印刷屋の擺擇で二三日、印刷屋へ廻してから、そこの主人がどうとかしたといふので數日、愈〻出來て來たのが二月の末で、しかも主人の差障りで代りの者がやつたとかで、甚だ出來がまづい。

◇『どうも二月も末になつてから紀元節の句もおかしいし、それにこんなまづい出來では、今迄遲れた甲斐がない。まゝよ、いつか析もあらう。一年に一度、こちらの念の屆くやうにすればいゝのだから』そんな具合で大正十四年もとう〳〵暮れてしまつた。夏の頃までは『その日の山河の輝きをまのあたり、大正十四年紀元節』と

刷つた私製端書の一束が、本箱の

袂の感じ

見目德太

きものゝ袂、殊にうら若き乙女の長い振袖は優美なものには違ひ無いが、然し其優美さを償ふべくあまりに贅澤に且つ高價に思はれてならない。實際長い袂は實利とは甚だしくかけ離れた、非活動的のものであると計り思つて居たが、最近計らずも袂の効果を知るの機會を得たのであるが——今更そんなことを云つて居るのは頗る迂遠との御叱りを受けるかも知れぬが——それは過ぐる日公會堂で藤間の舞踊を見てからである。あのゆう子が長い袂をひらめかして柔かに輕く踊るからだの動きと、手足の捌きに連れて起る袂の優美にして變化の多い曲線的動搖は、全くからだの運動と調和を得て居つて、其の運動の補足となり、擴大となつて居るやうに思はれたが、これは西洋のクラシカル、ダンスで、半裸體の腕のみの描く曲線運動とは聊か趣を異にしたものであつて、からだの働きの助けとなるべき袂の効果著しきを感じたのである、つまり長い袂に單に靜的の優美さを感じて居た私は、計らずも動的に尙ほ一層の優美さを見出した譯である。

元來舞踊は感情の動的發露の一定の型式を備へたものであると思ふ——これは或はエゴイティックな定義かも知れぬが——吾々の日常生活に於て感情的發作の刹那、其ほとばしりはからだの働きに現れて、其の中に所謂舞踊のエレメントとなるべきものが含まれて居る筈である。

ほころび初めた頃の處女の起居動作は極めて美しいものであるが、それは限りなき羞恥につゝまれて頗るデリケートなものであるが、擴大裝置にも比すべき袂によつて美しきからだの動きが明かに吾々の眼に映ずるに於て袂の効果は著しきものであると、審美的に見なければならぬ優美な袂に對し、非常識にも科學的批判を下すの愚を皆さんお笑ひ下さい。

刷つた私製端書の一束か、本箱の一隅に頑張つて、何かの拍子で目に觸れる度に冷やりとしたものだが、此の稿を書かうと思つて見たら、いつの間に何處へ行つたか、もうなくなつて居る。

◈よもやま帖

川尻非空

◎本町の高木德爾さん『天下一品とはこのことだす』と、かねがね自慢にして居る一品がある。

◎それは、さる高貴の方が御佩用になつた見事な軍刀——中味は勿論古刀の名劍である。

◎いつかこれを伊藤公に見てもらふと、『間違ありません、大切に秘藏するやうに』とのことで、爾來先生、何か機會があると、この軍刀の存在を、世間に主張しないでは置かない。

◎何んでも、高貴の方から、朝鮮のさる大官へ——それが轉々して、高木さんの手に歸したもので拵へなども、實に見事だといふ。

◎赤十字の大橋次郎さんといふと、自他共に、正眞正銘の鱧カラを以て、相許してゐるが、よく聞いて見ると、十年も前からこつそり義太を修業し、それこそ顔に似ぬ乙な聲が出るとの世評です。

◎淺川伯敎氏といふと、陶器研究の權威ですが、さすがにお宅は陶器の山を成して、足の踏み場もないくらい。

◎氏はまた恬淡な人で、田舍旅行などで、よく名器を見つけますが、『これは△△氏好みだ、ふむ△△氏を喜ばしてやらう』などと何の惜氣もなく、小包を包裝してゐます。

閑話二題

寺尾猛三郎

僞善と僞惡

世の中には善人もあれば、惡人もある。然し微塵も惡の分子を含まぬ、純善人も尠いが。毫末も善の素質を有たぬ、極惡人も稀れだ大抵は善人か惡人か判らない。いくらか善の量が多かつたり、惡の質が多かつたり。時と場合に因りて、どちらか色彩に濃淡が出來るそこで善人と褒められ、或は惡人と罵られる。誰でも惡を行ひながらも、善人と云はれたいのが人情だから。善を爲しながら惡人と呼ばれたくないのは勿論だ。だから擧世滔々僞善者ばかりで、僞惡者は滅多に見付からない。ある意味から言へば、多くの人は悉く僞善者たとも云へる。が然し今此處で特に僞善者と云ふのは。普通の人でなく、通俗に所謂僞善者の事である。惡も惡徒らしき惡は。何處か可愛い點もあり、悛まるべき見込も多い。そして惡に强ければ善にも强いと云つた趣があつて賴母しいが。僞善者だけは實に度すべからざる曲せ物だ。此の僞善者が僞善者と云はれても、僞惡者よりは好いでしよう。などと受賣して濟し込んで居るのを見ると、歪むほど横つつ頰を毆り飛ばしてやりたいと思ふ。此の言葉ぐらい、僞善者らしい言葉はない。癪にさわる言葉だ。小善でも小惡よりは宜しい、と云ふ言葉に似て非なるものだ。一たい僞善が僞惡よりなぜ好いか、イヤサ僞惡がなぜ惡いのか。表に善人を粧ひながら裏に惡念を包む奸佞邪智の人間が僞善者だ。外は惡人と罵られても內に善心を藏する純良誠意の人物が僞惡者だ。吾等は、甘んじて僞惡者となる人々を歡迎する、禮賛する、熱寧する、崇拜する。芝居を看ても、此僞惡者にはよく泣かされる彼の寺小屋で嘗秀才の首實檢の松王丸はどうだ。立派な僞惡者だ。安宅の關で主公義經を鞭つ辨慶も僞惡者だ。政事家にはよくある、伊井直弼なぞも僞惡者だらう。支那に對する英米が僞善なら、日本は僞惡だ。數へれば例は有ることは有るが至つては、それこそ枚擧に暇あらずだ。標本はそこらにゴロゴロ轉かつて居る。就中宗教家等に多いそうだ。いづれにしても、明日にも化けの皮の剝げる僞善者が百年史家の定論を待つとでも言ふべき、僞惡者に對し。よりは宜ろしいなぞとは無禮極まる言い草だ

幸と不幸

幸とか不幸とか云ふものは。元來實體の無いものだから。幽靈の有無を議論する樣な感が起る。有る樣な氣持もすれば、無い樣な氣持もする。金殿玉樓に棲んで飽食

暖衣して居りながら、幸福と思はない人も多い。茅屋に安住して粗衣粗食僅かに露命を繋ぎながらも寢ても起きても難有い勿體ないと幸福を感じて居る人もある。或人は、それは勿論前者が不幸で、後者が幸福だと、悟つた顏に答へる然らばいざ汝はどちらを取るかと云へば。さあと考へる、前者を羨むらしい。或る大名が毎晩乞食になつた夢を見る。そして或る乞食が毎晩大名になつた夢を見る。つまり大名が夢で不幸になり、乞食が夢で幸福になる。どちらが幸か不幸かと云ふのだ。然し夢を見なくても、果してどちらが幸か不幸なのかは判らない。或は乞食は毎晩不自由な大名になる事を悲しみ大名は毎晩氣樂な乞食になることを喜んだかも知れぬ。主觀的と客觀的とは無論一致しないが。主觀的に幸と感じたことも不幸となり不幸と歎じたことも幸となることもある。所謂騫翁の馬だが。騫翁の馬の如く幸と不幸をチャンポンに轉換しないで。事實は其儘でありながら、幸が不幸になり、不幸が幸になることもある。幸なるものゝ正體はいよいよ判らない。或る年の暮、田舍の若者が其母に對ひ。どうか新らしき著換の一枚も拵へて、正月を迎へたいと云ふたが。希望は達せられそうもない。だんだん正月も近くなり。若者は更に云ふ。せめて餅の一升なりと搗いて歳を取りたいと。而し其希望も達しられない。大晦日の晩となり、若者は誤つて雪隱に陷つた呼んで曰く、母じや人どうか糞壺から上つて正月だけしたいと。そして糞壺から引上げられて正月を迎へ、僅かに幸福を感じたろうと思ふ。こう云ふところにも幸福は

ある。然し上つた瞬間馬鹿を見たとはない。例へ一時は之れが幸福大傑僧なぞが苦境に遭ふて泰然自

る言葉だ。小善でも小惡よりは宜　持もする。金殿玉樓に棲んで飽食　思ふ。こう云ふところにも幸福は

京城雜筆

ある。然し上つた瞬間馬鹿を見たと不幸を歎じたらう。そして餅が搗けなかつたことを不幸と思つたらう。餅が搗けて居れば、著物の出來なかつた事が不幸となるであらう。一體幸とは、どんなものだらう。思ふに人の心の影だらう。ちようど、形の影に於けるが如きものだろう。人が心に幸福を求めて追つ駈ければ。何處迄でも逃げる。之れで幸福を捉えたと思ふことはない。例へ一時は之れが幸福だと思ふこともあるが。暫くすると眼前に幸福がブラ下つてお出でお出でをする。顧みれば自分は依然不幸だなと思ふのだ。然し無關心で靜に起つて見れば。影も靜かに付添つて居る。或は大勇猛心を起し。吾は幸福を顧はぬ、七難八苦を求めんとて逃げ出せば。幸の影は何處迄も追駈けて來る。奈落の底に陷つても離れない。彼の偉人傑僧なぞが苦境に遭ふて泰然自若たるのは。決して忍耐して居るのではない。彼等は怨る境地にも幸福を感謝して居るのだ。だから幸福になることは別段面倒なことはない。俺の現在は幸福だ、勿體ないと思へば即身即幸だ。

野人語

岡村介石

◎

玄人はだしの作品と推稱する銀座松坂屋に開かれた全國小學教員聯合大會の餘興、美術展覽會の出品寫眞を新聞で見ると。裸體美人の畫と彫刻が、如何にもホン物を想見さす上乘の出來榮が見へる。

◎

放蕩息子にあらざる品行方正の小學校先生が如何にして斯く婦人の肉體を畫に彫刻に素人放れするまで研究したか?。

◎

お手元の妻君か、母か、姉妹か、恐らく實銀を拂つたモデルの表現であらう。

◎

けれども、抑も先生等がこれを作品するには平素から女性の姿體に注目したことは入念であつたらう。

かん心なことだ。

◎

併し世のうら若い小學校の女教員にして若し男性の裸體姿を此の如く入神に作品したとしたら、世人はその作者先生に對して如何なる感想をもつであらうか。男教員の畫に對すると同樣藝術觀に止めて毫も餘情を感想ぬせぬであらうか?。

◎

更にまた、勇敢な女流畫家があつて、男教員の畫の如く男子のそれが如何にも隈々躍々たるところを畫いたとしたら、御同樣男子としてその畫面に對して恍々復惚々、妙感視することが出來るであらうか?。

◎

横暴だ、世界を通じて男は。母の尊嚴をけがしたり、愛妻の秘奥を晒したり、或は神聖なる愛人の美を汚したり、鐵面皮も甚しい。

◎

そして現今の教育者が天地自然の詩を解せぬことは田夫野人よりもむごい。

◈茶を啜りて

吉田莊一

◎朝鮮火災三崎さんの碁は、堅實を以て鳴つて居る。

◎實業社會では、大關格で、誰に向つても、二目か三目か置かして居る。

◎ところが、その堅實な三崎さんも、有賀さんにかゝると、奇襲また強襲で、殆んどシドロ、モドロにやられるのは、面白い。

◎實力からいふと、三崎さん一目も置くと、碁になる筈だが、何しろ相手が、辛烈無双と來てゐるので、三目位も置かせられ『イヤこれは怪しからぬ、こんな筈はない』大汗たら〳〵が、仲々愛嬌がある。

◎梅澤呉服店といふと、明治町でも古い呉服屋だが、主人の友七さんは、仲々の讀書家であると共に、物を書かせても、頗る立派なものだといふ評がある。

◎警務局の國友警務課長、警句と洒落とは、堂に入つてるとの評だが、道樂に俳句も作る。それから閑があると、烏寫を樂む。ところが、その石を下すことの早いこと〳〵、それこそ息する間もない。そして勝つてもアハハハ、負けてもアハハ……。

◎小杉謹八君、御自慢だけに、碁も將棋も強い。先づ田舍初段。

【一一】

洋畫界の諸傾向

山田新一

【一二】

二科會が帝展に反旗を飜したのは既に十二年の昔となり、日本美術院洋畫部の分立に草土社が加はつて生れた春陽會は今春その第三回展覧會を開き、更に又この春陽會をさへ喧嘩相手の岸田劉生氏と共に脱退する處となつた梅原良三郎氏は、歸朝以來之と云ふ地盤のなかつた川島理一郎氏と携へて國畫創作協會に入り土田麥僊氏等を輔けてその洋畫部を興すことになつたのであります。即ち我國洋畫壇は帝展に對するに之等の民間三團體を以てして四大展覧會の對立と云ふことになりました。

偖この過去十餘年こそは吾國洋畫壇にとつて最も多事にして、然かも驚くべきの進歩によつて惠まれた時でありました、勿論吾洋畫壇は今後も愈々進歩するでありませうが、過去十年こそは或意味に於いて正しく一時代を劃してゐます。そしてその榮なる先驅者こそは二科會でありました。

二科會の出現こそは十年前の日本洋畫壇にとつての、確かに大きな一つのセンセーションでありました。黒田清輝、和田英作、岡田三郎等諸先生が留學師事したラファエ、ルユラン先生より得た處の官學的印象派風の畫風以外に、たゞ一つの目標さへなかつたと云つても過言でない當時の畫壇に、潑溂たる印象派以後新傾向の核心を傳へて、滿天下の青年畫家達をして新しい感覺の世界に醉はしめたるこそ、當時の新歸朝者で、然かも留學生として最初の異端者であつた、藤島武二氏及び相繼いで歸朝して、今は二科會の元老となり當時は氣鋭の新人であつた、石井柏亭、有島生馬、湯淺一郎、正宗得三郎等の諸氏でありました。

藤島氏は西班牙の情熱家ゲロアヲを慕ひ、傑作『幸福なる朝』『うつゝ』等に特異の幻想的色彩によつて、當時の若人達の殆ど全部を魅了してゐたのですが、文展に於ける先生の地位は不遇で二科の旗揚げには初めその首領を以つて許されながら、却つて帝展に留つて今日の大をなすなど、實に畫壇に忘れられぬ裏面史を持つて居ます。

さもあらばあれ、二科會は石井柏亭氏終始善くその采配を振ひ、文展分離後直ちに日本畫壇の大きな力となり、更に安井曾太郎、梅原龍三郎、兩氏の歸朝を迎へ、前者はセザンヌへの最も正しき理解を、後者はルノワル翁の限りなき寵を其儘に我國へ移し植えた功績實に尠少ならざるものがあります加之、最近新會員に擧げられた、鍋井克之、小出楢重、黒田重太郎中川紀元氏等、全く二科會によつて育て上げられた、新人等と雖も夫々特殊な佛蘭西畫壇の新傾向を日本へ紹介した點に於いて、立派な業績を遺してゐます。

さてかく二科會の過去及現在を通觀して、二科が我國畫壇に盡した功績は？と云はれゝば言ふ迄もなく、絶えず世界畫壇の新興藝術に留意し、之を最も早やく、然かも最善の理解をもつて紹介した點でありませう。二科會自身も勿論之を自覺し、今後も此の方針を基調として二科會の空氣は愈々新鮮に保たれて行くことでせうけれ共この傾向には一面に於いて、極端な佛蘭西崇拜者に墮ちて、更に世界の潮流に一歩を先んじて棹すべく餘りに多くの危險が伴ふとも云へませう。

二科會の此の如き傾向に對して全く反對の見地を進みつゝあるのが春陽會であります。春陽會幹部中、小杉未醒氏を除いた舊院展同人の殆ど全部即ち、山本鼎、長谷川昇、足立源一郎氏等は、全く、二科會の人々と共通な傾向を持つた人々でありましたが、春陽會になつてからは、岸田劉生氏等草土社同人達を迎へ之を重用して、全く東洋趣味を基調とした、草土社風の作品をのみ鑑別に通過せしめ往時の美術院系を夢見た出品者達を呆然失望せしめて了ひました。

是もとより、小杉、山本兩氏の如き、畫壇の智將を以つて任ずる人々の鮮かな參謀振りによつて生じたもので、要する處は、帝展、二科等の既成大展覧會に對抗すべく、殊更に會の特色を作つたものでありませう。その故にか、春陽會の東洋趣味が、畫壇全體に及ぼした影響は、二科會のそれに比して、極めて尠少で到底匹敵すべくもありません。然し油繪に於ける東洋趣味の確立を明らかに提唱し

た點は、日本の美術史上にどうし　義彦氏の如き溫健派に於いても、　向を立派に了解し盡し、愈々世界

京城雜筆

た點は、日本の美術史上にどうしても遺されねばならない處でせう唯餘りにそれが回想的な東洋趣味に終りつゝある點と、展覽會の收獲として、何時も大作に乏しい憾みとは、徒らに會の空氣を退嬰的となし、前途に一抹の暗雲をたゞよはしむるものと云はなければなりますまい。

國畫創作協會は我が邦畫壇の新智識であつて、その過去も、將來も眞に興味あるものと云ふべきですが、その洋畫部は、梅原龍二郎川島理一郎兩氏によつて、之から經營せられんとしつゝあるものであつて、その前途に就いては、未だ逆睹し難いものでありますが、餘りに高踏的で、我儘で、二科にも、春陽會にも容れられなかつた梅原氏と、才子肌の川島氏との取合せ面白く、又單に兩氏の傾向をのみ見るならば、梅原氏は人も知る如く、ルノワルからマチスへ、川島氏はマチスからフェリス邊りへ……と共にその極めて感覺的な點に於いて一致してゐます。

最後に、帝展洋畫部は、歷史に於いても、現今の趨勢に於いても矢張り我國洋畫壇の中心勢力を握つて居ると言ふべきでせう。併し會員、委員中には、二十年一日の如く、進歩なく、徒に舊套を守ることにのみ安んじて、社界からも畫壇からも置去りにされさうな人の多いことは、官展としての制度上止むを得ないことながら誠に歎かはしいことではありませんか。然らば現在の帝展の中心は？と問はるゝならば、私はどうしても槐園社系と答へなければなりません即ち本年度の帝國美術院賞、熊岡義彥氏の如き溫健派に於いても、又高間惣七、牧野虎雄、奧瀨英三北島淺一氏等、新委員又は特選級の人々で、佛關西の新傾向に南畫或は北畫の風格を見る如き線描を加味して、その清新な色彩を援けしめ、獨特なる境地を拓いた點に於いても、先づ、槐園社こそは現在、帝展の中堅を確實に握つて居ると云つて差支へありますまい。

かく現在に至る日本洋畫壇の主潮を觀る時、日本はよく進んで來たと云はなければなりません。そして今こそは、世界のあらゆる傾向を立派に了解し盡し、愈々世界に特色あり遜色なき日本を油繪の上に、完成せんとしつゝあるのではありませんでせうか。

そこに幾多建設の難關は横はつて居るのですけれ共、吾が若き日本こそは必ずやよくそれを乘り越えて、伊太利の文藝復興や、佛關西の印象派完成に比して遜色なき、大日本時代を作り、世界美術史上に、消ゆることなき燦爛の光を放つの日を、そして偉人を、吾等は待ちます。（一九二五、一一三〇）

忙人閑話

吉田莊一

◎

歲晩氣分のあわただしい時、京城日報社長副島さんの書いた『朝鮮統治の根本義』といふ一文が、端なく問題となつた。

◎

副島さんは、よく問題となる男だ。この前は、來任早々、何とかいふ口禍を起し、今度は、洋行戻り早々、また拳石を、古池の中に叩き込み、どつと千波萬波を捲き起した。

◎

一體、副島といふ人は、正直なマジメな、思つたことは、何の苦もなく言ひ放つといふ、貴族特有な、單純な、世話馴れぬ先生である。問題は、どう結著するか知らんが、恐らく『こんなことになるものかナ！』と、我れながら茫然としとるのが副島さん。箇人としては、むしろ氣の毒な、同情したい位なものだ。

◎

この間、齋藤久太郎氏が、三矢警務局長と同席した時『私も一刀を秘藏して居るから見て頂きたい』『それは何より、早速拜見しませう』そこで、齋藤氏『犬養木堂氏舊藏、水田大與五國重、二尺三寸五分』といふ刀箱をもち出す鞘を拂つた三矢さん、しばらく見てゐたが『こりやア不可ん、こんな大與吾があるものか、また犬養氏ほどのものが、こんな刀を秘藏する筈がない』プツリといひ切つてしまつたので、流石の齋藤氏『ハーテな』

◎

石森公論氏の長唄といふと、やかましいものになつて居るが、そのまた熱心と來たらヒドイものだ社に出ない日はあつても、お師匠さんの前に、日に一度はかしこまらぬと虫が納らぬらしく、火が降らうが、槍が降らうが……そしてお師匠さんに訊くと『えゝ、えゝお上手ですとも、何しろわたしの門下筆頭第一ですからネ』と。石森さん、奢れ〳〵。

十五年

堂本貞一

よく、世間では十年一昔と謂ふが、大正の御代も年を重ねて、茲に、第十五の新春を迎えることになつた。

新年、まことに慶すべく、賀すべきである。殊に、私は、此の十五年――今少しく強めて言へば、大正の第十五年と云ふところに、深刻なる意義を見出して此の新たなる年を祝福したい。

さて、世の中を見渡すと、一方では、正月がなんだ、お盆がなんだ、やれ新年の、やれ新春のと騒ぐが、昨日と今日と何處がどれだけ異ふのかと空嘯いて濟し込んで居る人があるかと思ふと、他方では、方角がどうの、星まわりがこうの、箸がどうした、履物がこうしたの末に至るまで、一々因縁をつけて氣を揉んでる人もある。人さまざまとは、よくも謂つたものだと思はざるを得ない。

ところで、私は、幼い時から東京で育ち、下町にも長く住んで居た爲めに、江戸氣質の一つとも見られるところの、所謂御幣かつぎや縁喜を氣にする例を澤山に知つて居る。其の中には一概に迷信としてけなしつけるわけに行かぬものもあり、また、大江戸の氣分を味ふよすがともなるべき意さのあるものもあるが、さればと云つて餘りに縁喜をかまい、迷信に囚はれ、トラデイションのバンドに縛られて動きのとれない破目に陷ることには固より感心出來ない。

しかしながら、理窟一點張りに正月がなんだと云ふ氣にはなれない。否、なりたくない。正月がなんだ、昨日と今日と一日のことで何處が異ふのか式に頑張る人の眼から見られたならば、私が十五年と云ふところに深刻なる意義を見出すなどと言ふのは、まことに噴飯に堪えぬところであるに相違ないと思ふ。しかも、私が、此の種の人々に伍して、正月がなんだと云ふ氣になりたくないと思ふのは所謂理窟ばかりで世の中が行かうと思はないからであり、行かすべきものではないと信ずるからである。

惟ふに、世の中の進みは、決して平板ではない、同調ではない、其處には常にウエーヴが描かれ、緩急がある。殊に、人事を下するに、機會と勢ひとを無視することは大なる條件を除外することにならう。釋迦や基督が、あの偉大なる宗教をのこした。シーザやナポレオンが、あの赫々たる功業を樹てた。ダエートウベンが妙なる譜を、カントが深遠なる研究を……と憶ひ來れば、古來幾多の光輝ある業績が人の手によつて築き上げられた。それらはすべて、その人々の網大なる才幹、異常なる努力而して其の基調をなすべき嵩高なる人格の賜物であることは疑ひなきところではあるが、其處に、惠まれたるチャンスと、心ありてか心なくてかの別こそあれ、乘ずべき勢ひの存したことを見逃す譯には行くまい。

今や、國歩の艱難が叫ばれ、世相の行き詰りが嘆ぜられて居る、吾人は、此の難局を打開すべく、不斷の努力、絶えざる緊張が要求されて居るのである。しかしながら、神ならぬ身の悲しさには、此の不斷の努力、絶えざる緊張なることが言葉通りに實現し得るものではない。が、しかし、能ふかぎり、此の要求に副ふべき途は、あらゆる機會を捉えて心氣を一新し刺戟を新たにすることによつて開かれるのである。

一と云ひ、五と云ひ、十と云ひ十五と云ふ。此の意味に於て逸すべからざる一つの機點ではなからうか。殊に、政治上には普選法の成立したる次年、財界も整理の効果が將に輝き出でむとする兆ある此の年。

◇煙を吹いて

石川利夫

十八銀行の西村さんは、いゝ人である。時々記者を叱るけれど、やつぱりいゝ人である▲この間も、銀行に顔を出すと『平常どうしとる、ちつとも來ないぢやないか、しかし必要な時だけ、道を忘れないのは感心……』ピシリとお面をくらわして、腹を抱えて、笑つて居る▲そこに少しも毒がない▲西村さん、原稿は仲々書かぬが、その座談は、温恂と機智に充ち、お話を聽いてゐると、ツイ時の經つのを忘れてしまふ。

な事に初期齲蝕は自分で發見する

感想一つ

木戸虎藏

△　△　△　△　△

齒に一番多い病氣はやはり齲蝕である。齲蝕に罹つた齒を完全に治療する事は勿論必要であるが、一歩進むで齲蝕にならない樣にするのは更に賢明な方法である。眞の意味の豫防は日常の口腔淸掃を第一とするが極初期の齲齒治療は豫防のうちに入れていゝと思ふ。今頃治療醫學と豫防醫學とを論ずる程世人は無智ではないが、厄介な事に初期齲蝕は自分で發見する事が極めて困難である。痛み出してはもう遲い。此意味から年に一回齒の惡い人は二回三回定期的診査を必要とする。こんな心懸けの人が京城に幾人ありますか？。早く發見して早く治療する事は時間と經濟と苦痛とを節し健康を增進せしめる事が出來るのである。つまらなきものは骨惜みだ、滿著だ。齲齒の豫防はコレラ、チブスよりも苦痛がなくて確實に出來る事を知つていたゞきたい。

尙小兒に就ては大人よりも更に必要である。荒い風にも當てないで可愛い〳〵で却つて虛弱に育てあげる世のパパさんやママさん、小供に齲齒の苦痛を知らせるのは親の責任である事を御承知下さい。

生きとし生けるものは何よりも生命を大切にする、生きんが爲めにはどんな事でも顧みないのが自然だ。只人間は僅々な條件に支配されて命よりも尊いものを持合せて居る。昔の物語に出て來るものは至純にして尊いものが多いけれど、近來はあまり感心しないものもある樣だ。

それ程大切なものであるから吾々は直接間接に其保全に全力を盡す可きであるのに、事實は必ずしもそうでないのはどうした事だらう。

酒が止められない、煙草が斷たれない、夜更し朝寢……等々々。然しそんな事は僕の領分でないから止めて置くが、も一つある、齒を大切にしない事だ。

△　△　△　△　△

齒がいゝから長生するとは言へないけれ共、長生する人は齒がいゝ事は事實である。鳥類は齒を有しないが其代りには丈夫な胃を持つて居る。人間の齒と胃との作用を一緒に營むのである。これ丈けで血の環りのいゝ人には齒の大切な事が解る筈と思ふけれども、一つ附け加へて置きたいのは命を取られる病氣のうちでは何よりも消化器の疾病が一番多い事だ。前門に迫る敵よりも後門には更に〳〵大敵が居る事を考へなければならぬ。

京城雜筆

◈舌壇の人々

川尻非空

◎切山辯護士、黃金町に淸酒な洋館を設け、十月からそちらで事務をとつて居る。

◎何んしろ刑事辯護では第一人者――あれ位の事務所は、なくて叶ふまい。

◎頭も辯も精銳無類なんだが、人間にはいろ〳〵弱味があつて、この切山さん、人から泣かれると忽ちまゐる――一命縣命に骨を折つてるから、ヨホドぼろい事件だらうと思ふと、豈に圖らんや、たゞの事件。おまけに被告の家族を養つてゐるなぞは、この人ならでは出來ないハナレ業である。

◎骨張つた男――入江義之助君も、とう〳〵城を開けわたした。何んでも大阪で開業するといふ。そのあとへ引移つたのは、新進賢出しの山中大吉氏、これは眞率熱誠な人だから今に必ず認められる。

◎とても、事件をよく調べてゐるので、有名なのが榎本隆氏、ふだんは口重さうな人だが、その研究力と、急所を押へる力には誰も敵はないさうな。榎本さんはまた德の人だ。恐らくあれ位、交はる所に厚い人はなからう。殊にアノ社會ではね。

◎軍厚で、評判のいゝのは堀辯護士である。堀氏が代理となつて自分を訴へたといふと、『それはまアよかつた』と喜ぶ人があるから妙。堀さん同情に富んだ人で、決して過酷なことはしないといふ評判。

◎德田辯護士、新進で、氣輕でどこか飄逸味がある。誰とでも友達となつて、ワシが、お前が。

【一五】

拈華微笑

螺炎　今村鞆

日本の食器に、チリレンゲと稱する、陶器で出來た、一種の匙がある。

此物には、全體の形ち恰好から觀て、雅味があり、俳味があり、野蠻人の拵へた、製作品が持つて居る樣な、無技巧な技巧が見られ又た何んとなく、穴居時代人が使用したる、陶製品の如き、單純さと、素朴さとが現はれて居る。

遠い昔に遡つて考へて見るに、原始人が液體を掬すべく、最初に考案せられたのが、果實の殼の利用である、現に朝鮮には、今に猶、パカチを使つて居り、南洋の土人は椰子の實の殼を使用して居る、而して、動物の骨や、貝殼等を併せて使用した事は、彼等の遺物に由り察せらるゝ。

其後、此等天然物の利用が、人工品に代はつたのであるが、此チリレンゲの全形を、花瓣の形ちに擬へた所に、日本人が自然を鑑賞する眼のすぐれた、優にやさしき國民性の一端が現はれて居るのは實とに面白いと思ふ。

此れを漢字名稱にして、差當り仙葩とでも付ければ、詩中の句になるが、本名のチリレンゲも、字音の響きがよく、名其物にも詩趣がある。

一層のこと、此れに一場の神話を假託して、緣由づけると、猶面白くなると思ふ。抑も其神話の組立ては、舞臺を先づ、天の橋立か三保の松原、或は須磨か明石と云ふ如き天下の景勝の所に選定する乃で鼓の遠音が響くと。

『時しも春の浦景色、吹くも長閑けき朝風や、波立つゝぐ松原の、常磐の色の梢には、月も殘んの朝霞、釣り人も見ぬ海の面に、果なく續く天の原〳〵』

と謠ひがかりになる、大空に劉亮たる天樂鳴りて、天女が悠揚と舞ひ下がる、其の圍りに金銀紅白の蓮花がヒラ〳〵と隆つて居る、地に墜ちたる其のかたみの花びらが、石の如く固くなつて、後の世に殘つたのが、此のチリレンゲの濫觴であると、勝手にそふ極めてしまふ。

百尺竿頭更に一歩を進めて、其場所へ神府を建てる、近江の多賀神社から杓子を出す如く、其の神社からチリレンゲを授ける、御神體は、東中野の智和氣神社、郡山の赤石神社、仙臺の道祖神社など、同一系統のものにしてPhallie Worship の Yoniの病氣祈願に結び付ける……としたらどふであらう。

と此處まで想像を逞ふした爲めに、折角箔付けた、チリレンゲの俳味も雅味も、少々怪しくなつて來たから、此邊で止めにして、扨て此頃のよふに、空の景色も多ざれて、庭の落葉に初霜を見るよふな、季節になれば、夕べの食卓に鋤燒、チリ、寄鍋、ねぎまの如き鍋の香りが懷かしくなる。

昨年の冬のことである、風のある夜ひそかに、友人と火加減よき溫突の一間に、饅鍋を中にして差向ひ、春の樣な氣分に浸り、睨むが如き饅の眼ざしを、あざ笑ひつゝ、何の命が二百文と、盛んに箸と杯を動かしつゝ、駄辯の放送を始めた。

『君、人間の氣持と云ふものは、デリケートなものだよ、僕は此のチリレンゲで、斯ふやつて、汁を掬ふて飲む所に、何んとも云へん氣分が湧く、たまらなく嬉しいよ、此れをあのギコヂなスプーンでやつて見玉へ、うま味もそつけも無くなる』

『……』

一六はホロ醉機嫌で、連りにチリレンゲを振り舞はす、片六は咽を鳴らして無言でパク付いて居る。

『特に此の……チリレンゲには禪味がある……君は拈華微笑と云ふ譯を知つて居る?』

『ソンナ小面倒な事より、此白ワタが迚もたまらん、君に食はれぬ中に、片付けて仕舞おう』

『マー聽き玉へ……昔し釋尊が靈山の上に八萬四千の弟子を會した、其の時釋尊が、蓮華の一ひらを拈して、衆に示した……斯ふ云ふ風にして』

とチリレンゲを胸の所に持つて來て身振をする。汁が膝に滴たる

『時に衆寂然たり、惟だ、迦葉尊者が微笑した、乃で釋尊曰く吾に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法門あり、不立文字教外別傳、摩訶迦葉に附す、をやつた。禪の極致は玆に在る、實に崇高玄妙だ……』

かある。

一層のこと、此れに一場の神話を假託して、緣由づけると、猶面白くなると思ふ。抑も其神話の組

京城雜筆

メートルを上げて、獨りで感心して眼が正法に据はつて居るが、相手は無關心に箸の湿槃に入つて居る、鍋の中は實相無相になつてしまつた。

一方の男はチリレンゲの形ちから何物かを以心傳心したらしく。

『僕が奇拔な談を、一つ聞かしてやる』。

と徐ろに話し出した、其要領は次の如きものである。

……

且ある田舍の長者が許に、花耶かしき深窓に育つた、妙齡の愛娘があつた、近々戀人と華燭の典を擧ぐる事となり、近き未來の甘き希望と幸福に輝いて居た時、フト此可憐なる佳人の氣分を暗くする一事件が發生した。

と云ふのは、如何なる星の廻り合せか、所もあらうに、妙へなるおん腰つきの下、春の浦邊に近く腫れ物を生じ、惱み甚しいが、縱令死んでも、他人に肌へを見せぬと、古風な事を云ひ玉ふ。

ヤットの事、兩親が說得して、醫師に診を受ける事となり、一日盛粧して、母親なる人附添ひ、屠所の羊の歩み進まぬ乍ら、目指す醫院までは到著した。

來は來たが、佳人は紅顏を袖に掩ひ、ドアの入口に、蹲の如くかなぐり付き、診察室に這入らうとしない、睫毛に露さへ宿して居る

母親が耳許で『命には換へられぬぞよ、何んのコリヤッ、思ひ切つて御目にかけさんせ』（友は此所を話す時、田舍訛りにアクセントを付けて眞顏で言ふ、夫れが如何にも可笑しい）と激勵して、漸つと室內へ押し入れた。

『此れからが面白くなる、一寸一服して』とじらして煙草を吸ふ。

來たから、此邊で止めにして、扨て此頃のよふに、空の景色も冬ざれて、庭の落葉に初霜を見るよふ

やがて又談りつゞく。

母親は氣が氣でない、娘の手術を案ずると共に、醫師の人格に對する不安心もあり、動悸を高めてドアの隙きから、目じろきもせず覗いて居る。

娘は死せる者の如く、棒の樣にコワバッタ軀を、うつぶせに、寢臺に押し付けて居る樣である燃ゆるが如き、緋の湯卷と、はち切れるよふな、柔和な圓い曲線のサインカーブを成した、純潔なる、白蠟の如き肉體の一部が、院長と看護婦の立つて居る間から、僅かに隱見する。

軈て容易く手術が了つて、佳人は嫋々として冬の胡蝶の如く、蒼白き面に少しく淡紅を潮し、前をつくろふ乍ら、室外に出でて、母親と共に歸つて往つた。

其後とで、院長と看護婦が笑を含み乍ら、談をして居る。

『先生あれは何んでした?』

『一寸見た時、變んだと思ふたよ、人並と違つて居たからネ』

『先生がピンセットで叩いた時コッ〳〵と、音がしたではありませんン?』

『ウーン、考へたものだネ、あのチリレンゲと云ふ物があるだらう、あれで、ピタと蓋をして後ろからでも、毫しも見へぬ樣にして居たよ、腹の下へ手を廻して』

……

此の無遠慮なる、來客の珍談の爲め、家庭の嚴肅味をぶちこわされ、一同苦笑澁笑が、噴笑哄笑に變じ、有り丈を笑ふて顏を赤ふした。

長女はことに笑つた、次の間で鳴咽に似た忍び笑、泣き笑をして居た。

教外別傳、摩訶迦葉に附す、そやつた。禪の極致は玆に在る、實に崇高玄妙だ……』

本年冬になつて、妻が特別に大形の、格好の甚だよく無い、彼の器を買つて、夫れを食卓に上せた時、一同が期せずして目を輝した

『あの子が生きて居れば、コレを見て、嗤笑ひこけたであらふに』

と、フトつぶやいた時、在りし日の笑まいの面影が髣髴とした。笑ひの追懷から、憂愁を新たにした涙を誘ひだした。

思へば早や一年になる、いつまでも忘れ得ぬであらう。

◈世間ばなし

吉田莊一

◎この間、伊藤憲郎判事が、鄕里靑森に歸省して居ると、土地の有力者で、岸太一といふ人が來て嚴君と盛んに碁をやつて居る。

◎實力伯仲の間で、双方夢我夢中夜を徹して力戰するといふ有樣

◎お客が歸ると、嚴君思ひ出したやうに『さう〳〵岸さんの令息も、たしか京城に居られる筈、お前知らんか』『何と有仰る方ですか』『たしか岸巖といつた筈』『あゝ巖さんですか』『知つてるのか』『イエ、まだお目にはかゝりませんが、知つてるわけがあるんです』

◎こゝで、伊藤さん、誌友の岸氏が、お父さんの親友の岸さんの御令息といふので、アッとその奇緣に驚いたさうだが、一方岸さんの方でも、お父さんから便りがあつたらしく『僕も伊藤さんに、是非お目にかゝりたい……』

◎正月には、本社で、誌友會をやる。兩氏はその席上で、熱い握手を交はすことだらう。

新年への考察

井上　收

新年だから、正月めいたことを書く、といふのも些か月並であるが、どうせ人間といふものは月並でないやうな顔をし、その實月並をくり返して居るに過ぎない。

◇

私は正月前になると、二つの煩ひが長年絶えない、一つは家政といふことゝ、一つは年賀狀といふことである、家政は金さえあれば處理はつくやうなものの、その金といふ奴が、意外に內部生命を傷ける。金なんぞと高を括つて見たところが、私の親子十一名は、これがなければ年越も出來なければ、乾干しになつてしまふ、餘り感心した話ではないが、實は生活者といふのつぴきならぬ當面の現實であるから贅揚のお見遁しを願ひたい。

◇

こいつは隨分長年、愛妻（同棲十九年）とも苦み合つて見たが、今年も相變らず苦しい。といつた所で、人樣のお他力を仰ぐ、といふ男一疋を買物にもしたくない、乞食をするには、澤山の子供の手前ちよいとまだ氣恥しい。といつた所で、如何なものでせふ、年末になつて、苦しまぬ算段を敎へて下さい、とまかり出るにも出られぬ。

◇

といつたとて、雇主に對して『精だして働けといふ雇主なぜ相當の金を出さざる』と開き直るにしては、雇主から身に餘る待遇を受けて居る、じやあ君の家政が悪いんだ、財政能力がない爲だ、との落ちになるが、家政もあまり巧者しやない、けれども女房には手に遁へないほどの子を產ませ、世間並の子供の新年を喜ばしたい爲の、晴衣を一枚宛年末に調へるにしても、九枚いる、これにおやぢもおふくろも、匂ひなりとも新年の餘韻に浸りたいと思へば、十一人ぶんの新年氣分を準備しなければならない。

◇

マルサスといふ男には、會つたことはないが、今日人口問題食糧政策と稱して、現代文化生活者が苦悶してゐる、煩ひの種を、彼の男が人口論で敎へてゐるが、かういふどたんばに陷込まぬ先に、何とか、バスコントロールを信奉でもすべきであるが、考へて見ると、私が人口過剩で年末に苦むどころじやない國家といふ大世帶が、これで苦みぬいてゐる、その內には國家の人口問題も、何とかかたのつく時が來やう、その時まで私の家の人口問題も、滅多押しに押すつもりで、大正十四年といふ年も出超でおさらばの外はない

◇

次に殘るのが、年賀狀といふ問題。浮世がせち辛い爲か、年賀狀は虛禮で形式的なものだから廢止するがいゝ、と一部の文化論者がいふ。

凄いのになると……何とかにつき廢止するとか、缺禮するとか、わざ〳〵斷りの通知をよこすのがある。斷り狀を寄越す位なら、同じことで賀狀を出したらよさゝうなものである。

人間がだん〴〵パン屑みたいに、味もそつけもなくなり、冷え性の塊ばかり殖えてゆく今日年に一度の賀狀まで咎々した日には、全く氷の世界でも拵へあげるより外はない。年に一度のたよりは、お互にきいたり、きかせたり、一年間の意志を疏通すべきである。

◇

私はこの哲理（？）で多年、賀狀は丹念に出して居る。がまた謹賀新年だけのお定り文句を活字にすることそ、虛禮とか形式といふもので、眞實ならば、一々肉筆で心をこめて認むべきであるが、何百何千と直筆で出す

のは、島渡この忙しい浮世では不可能である。

活版でも印刷でもいゝ、なるべく當方の事情を巨細に述ふべきで、私は多年一家の戸籍謄本のやうな賀狀を出し、せめて一年間の我家の推移を、親しい人達に報告したいと、實行して來た。

◇

所がいくら賀狀を出しても、返事も應答もないのがある、かういふのは年々控へを拵へて置き翌年は失敬する。

只賀狀といふとビユウアに響かないが、一年間の通りすがりに挨拶の頭を下げるのと同樣で返事をよこさないのは、こちらで頭をさげても應答しないで、通り過る無禮者で、世が世ならば一刀の下に斬捨てゝ然るべき無禮打の代物である。

◇

なを一言、形式、虛禮序に考へることは、この賀狀を遞信省の都合で、前年のうちに認めさるやうに强ひられてゐるが、嬉しい事とは思へない、出來るならば、新年の空氣に浸つた春の心持で、恭しい心持で賀狀を認めたいと思ふ。まへ年の暮に、忙しない心理に追はれながら、今年も相變ず、など、印刷にしても、空虛な自己を欺く表現はしたくない、大方諸賢の御參加を念ず（一四、一一、末日）

新聞閑話

北門小史

◎記者團では、山副君の酒といふと、一名物になつて居る。

◎先生が、斗酒を呷つて、盛んに怒號を飛ばすのは、また一場の光景で、多少士氣を振揚するといつた意味もある。

◎ところが、その山副君が酒を罷めた。しかも堂々と禁酒賣告をした。何んだか寂しい。——いよ〳〵記者團は、シラフの當世才人ばかりとなつてしまふのかな。

◎時々は、武勇傳もいゝ。世の中がみんなお利巧になる中にたつた一つ持ちつたへた記者團の資產ちやないか。これも山副君の酒と共に、多少の名殘りが忍ばれる。

◎酒といふと、我佐野金儀君（電通）を思ひ出す。ふだんは大人しい、謙抑な人だが、一たび酒に向ふと、豹のやうになる。そして平昔の鬱憤が、活火山のやうに、勃然として陽發する。痛快な時もある。痛み入る時もある。が、翌日になると、佐野さんケロリと忘れて居る。あれが馬鹿に愛嬌がある。

◎この佐野さんも、近ごろふつゝり酒の噂を聞かぬ。大患以來、多少自重してゐるのかな。

◎京日にも居り、朝新にも居り、最後には泣きついて、日々に居つた經濟部の田山君（養平）豪酒のためだらう、昨年は總督府醫院の精神科に、長い間入院小し善くなつて、鄕里へ行つたと思つたら、親代々の家屋敷へ火をかけて腹を切つて死んだとは、餘りにむごたらしい。

◎人の身の上ほど分らぬものはない。この田山君など、大正八九年は、相場で大儲けをして出入悉く自用車、一夕よく數百金を擲つたものだが……。

◎今記者團での元氣者といふと、日々の森次郎君だらう。足も、筆も、口も、まア一騎當千といふところ、一日よく四五段を書き、餘暇に『京城府の花柳界』などといふ單行本を出して居る。

◎紅い灯の方へ、泳いで行くのも大好物、月のうち三日と家で夕飯を食ふことはないといふ。

◎すべて、各社の社會部長といふと、記者團でも流行ッ兒、年百年中、宴會の飯を食ひ、わが兒の顏を二タ月も見ないと歎息してゐるものもある。

◎野崎氏（朝新）などは、そんな風で、本が讀めぬ〳〵と、いつも口癖のやうに、コボして居る。

◈うわさ雜記

川尻非空

龍山の秋山督次君、今ではその土地切つての名物男である▲物わかりのいゝ上に、公共のことゝといふと、何んでも双肌ぬぎで世話をする▲だから、人望は仲々ある▲『原稿を』と頼むと『雜筆かね、雜筆なら、一度は屹度書く、大に抱負を書く』先生あれで、仲々讀んでるのだ。

懷舊

松田學鷗

曆軸回轉、茲に大正十五丙寅の年を迎ふるに至つた。寅は虎である、深沈にして大度あり百獸の王と稱せられてゐる。せめて此の年を迎へたのを動機に、輕佻浮華、柔弱虛榮、逸樂に耽ける江湖の氣風を一掃したいものである。髯ムチヤの大男が街頭を歩みつゝ童謠をうたつたり袴著けたる良家の女が、電車の中で藤間の舞踊をまねたりする緊張を缺いだ其の有樣は、如何に時勢の推移とはいへ、將來を思ふと、實に恐怖せざるを得ない。

光陰は流るゝ水の如くである過去を緬懷すれば後悔の事のみ多い。老いたる我れも昔は若者であつた。過ぎにし虎年の事など懷ふて舊き詩稿を取りだして見ると、先づこんな作があつた

羲輪廻轉暫難停。幽約追期集此亭。一棹浮春詩舫酒。數枝醮影玉池星。耽吟仙骨共忘歲微笑佛顏如有靈。風竹時聽猛于虎。曆分新舊醉將醒。

これは今より二十五年前なる壬寅の元旦を迎ふる辛丑の除夜、永阪石埭先生の雅莚で賦したものである。それに森槐南先生の評語があるから面白い。

坐中學鷗年最少、故七八仍見勇往之概、一棹十四字、殊清俊。

乃ち此詩は虎年を迎ふる前夜であるから其の想もそこに及んだのであるが、實際予は此の席上で一番年少であつたに相違ない。同夜會したのは、主人石埭先生を始めとして、森槐南、本田種竹、岩溪裳川、阪橋蹟園、手島海雪、一東石如の諸家と、予の八人であつた。今は多く故人となられ、蹟園、裳川兩家が生存されてゐるのみである。石埭先生は風流溫雅の君子であつた。本業の醫を一半に、嗜好とする詩を一半に、併せて一身を持せられたので雅會を一半兒社と名づけられ、極めて懇意なる詩人十二三名を限り時々自邸に招かれた、予も其の社中の一人であつたのである。先生の邸宅は神田松枝町で、彼の梁川星巖の住みし玉池吟社の跡であつた。殊に先生は、毎年除夜に南無賈島佛なる靈壇を設けて之を祭り兼ねて詩會を開き、柳橋の歌妓にして翰墨の素養ある者二三を聘し、杯酌せしむるのを例とせられた。當夜は必ず初鷄の鳴く頃まで宴を撤せず、元旦初刷の新聞紙を見て散會する程の風流事であつた。

初刷といへば、其の壬寅即ち明治三十五年の東京日日新聞の切拔が、今尙ほ予が册子に貼つてあるが、それに、『觀櫓擧虎圖』と題した拙作がある。

春暉洩窓輝古壁。林壑一幅墨光滴。非熊非貔蹲者何。雙瞳烱烱四無敵。百獸之王氣勢雄未嘯舌端已生風。一步近床怕觸爪。笑停椒觥戒小童。嗚呼仲選妙筆名不朽。豈讎虎皮留死後。無用姓字我慙人。打頭茅屋耽詩酒。回首大道車轔轔金冠玉佩朝紫宸。是誰功名畫麟閣。聖代桓桓多虎臣。

槐南先生は、之を評して、

結法超出意外、直有龍跳天門虎臥鳳闕之勢、足見落筆之際不屑隨人步趨、而別出機杼。

と云うて居らるゝ。此の明治三十五年は、北清事變の三年後、日露戰役の三年前である。當時の人心は緊張して、尙武の風は天地に滿ち、敵愾の氣は大陸にまで及ばんとした。詩は志であり情である。今にして思ふと、如斯き四圍の狀況は、自然吾輩の筆端にも豪壯の語となつて現はれたものであらう。之に反し輕佻浮華、虛榮相誇り柔弱是れ極まる今日に於て、如何に名匠の虎圖あるとも、題詠を試むべき勇氣も出ぬ。殊に明治三十五年頃の漢詩壇たる、群雄割據の有樣であつた、森槐南、國分青

匡、本田種竹の三先輩を大なるものとし、夫に岩溪裳川、野口寧齋、大久保湘南、北條鵬所、木蘇岐山、田邊松坡、大江敬香等算し來れば無數の覇者が旗鼓堂々として陣を構へ鋒を磨した而して石埭先生あり江木冷灰博士ありて、彼等の間を調和翰旋し揚風托雅以て文運の隆興を極めたことは今日の如き寂寞たるものでは無かつた。但、近頃快心に堪へざるものは、慶應義塾大倉組等の重鎭たり又緣故ある知名の士が頻りに漢詩の作製を始めたことである。是れ言ふまでもなく、大陸に向つて勇往邁進、事業を奬展せんには、自然支那の紳士や學者に接せねばならず、從つて彼れ等の得意とする詩の唱酬を必要と感じたからであらう。支那との親善を說き朝鮮との融和を言ひながら、其の日常用ゆる漢字亡滅を圖りつゝあるものなどとは、霄壤の差ある美擧と云うてよい。

偶ま筆に任せて老の繰り言を繰り返へせば、燈火の影では楚々たる水仙が笑つてゐる。

菊寒し

森　悟一

膝の子の客に物言ふ寒さかな
土芋に水の高さを灑ぎけり
殘菊や蒼り勞れし夕雀
秋茄子相搏てば鳴る玉のごと
さし櫛の飛んで落葉に光りけり
菊寒し病む子に粥をたきつゞく
鳴子繩しば〳〵潜り稻の徑
堆高き落葉焚まく相寄れり
秋日負ふて面も振らす水砧

幼兒を送りて神戸に

露けさは幼き眼にも須磨の秋

◈人事斷片錄

川尻非空

◎時實知事さんといふと、新聞ではスグその醉態を書く。

◎醉態以外、知事さんはないと思つてゐるのは、怪しからん

◎あの人は、醉つた振りをするのは、上手だが、その癖醉つても、どうしても居らん。持前の禪趣から、白ツぱくれて居るので、健康といふと、人一層氣にして居る人である。

◎凡そ、あれ位、書物を讀む人はなからう。あれ位、細心に氣をつけて、勉强しとる人はなからう。あの人の講演、清新にして博安、一寸類と眞似手がない。平生、奈良漬になつて、滿足してゐない證據である。

◎第二高普の校長平山正氏、漢籍の素養が、たつぷりとあつて、どこか大人の風格がある。教員間の信望も、タイしたものだが、同校から山田新一君のやうな洋畫の逸足の出たのも、やはりあの人の推挽に依ると。

夫婦の說

武井秀吉

私の村に父親が十年許り前に亡くなつて母と小供三人の農家がある。母は六十臺、長男は四十一歳である。亡父の存命中に同じ村から兩親が選擇して當時東京に游學中であつた長男に嫁を娶つてやつたが、此の夫婦は琴瑟相和して十數年一日の如うに變りがない、其の間には本年とつて十六になる娘の子さへある。尤も長男は悍潑ではあるが、薄志弱行の方で何をやつても長續きがしない、今尙東京で其の移り氣のまに〳〵轉々職を變へて居る。昨年夏東京で長男に會つたら母親の無情を嘆きかこつた。田舍へ行つたら母親から嫁を離婚すれば何時でも長男を家に入れてやるのだが、と流石に子を思ふ切な情と老人のあきらめ難い愚痴とを夜通し聞かされた。

一體離婚といふことは老母の考へるやうにそんなに容易く爲すべきものであらうか。離婚は夫婦の生存中に夫婦關係を解消すること夫婦は男女の結合、而して結婚は夫婦關係を創始することであるが之れは眞の夫婦は如何なる關係であるべきか、結婚は如何なるものであるべきかとは別問題であつて前者は事實の問題であるが、後者は理想であり而して價値の問題である、隨て其の人の人生觀に依つて標準の異なるのは當然である。事實と現實から價値と理想を描き其れに向つて努力することは人生の特徴であり又人類の誇りであると謂はなければならない。余輩は今夫婦道德の理想と價値とに就いて其の管見を記して見やうとするのである。

結婚の條件として容姿、才能、資財等を數へるものがあるが、婀娜たる容姿は夕を待たない朝顏の花に喩へることが出來やう、優秀なる才能は夏の日の陽炎に、山なす財寶は浮べる雲にも喩へ得やう人若し容姿、才能若しくは財寶の爲めに結婚するものあらば、之れ誠に果敢ないものであるのみならず、其の望を達し得るものは幾何もないであらう。世には又戀愛を以て結婚の要件となすものがある、其の所謂戀愛とは男女の間に生ずる靈肉一致の崇高な精神狀態と考へられて居る。男女の結合は形式上又は法律上完全な結婚であつても、其の間に戀愛がないならば眞の結婚でなく又眞の夫婦ではない、故に夫婦の間に戀愛が消失し、又は戀愛のなかつたことが判つた場合は離婚すべきである、離婚しなくても最早や眞の夫婦ではないと主張する。其の他結婚に或る不動の特定要件を要求するものは離婚に對して凡そ同一の結論に到達するであらう。

思ふに夫婦の關係は始めから完全無缺なものではない、始めから之等の場合に離婚してよいとは吾人の道德意識は容さない。元來結婚は權利義務の關係を生ずる法律之れは血液關係に代るべきものである。前述のやうに夫婦は新に創

【三】

理想的夫婦關係を目的として結婚するならば、恐らく結婚を爲し得る男女は此の世に幾干もないであらう。理想的夫婦關係は性に ついて自然的差別のある男と女が其の靈肉を結合して其處に一つの新しい生命を創造し、此の結合的人格を完成し、二人の屬する社會國家の發展に寄與することであらうと思ふ。即ち圓滿な家庭を造り子孫を敎養し、國家共同生活の完成を期することである。夫婦は此の理想的關係を實現することに向つて生涯相互に感謝と犧牲とを以つて結合し努力しなければならない、妻たるべき女や夫たるべき男を選擇するに當つて其の心身の狀況、家柄等を愼重調査し、出來る丈完全なものを選擇して結婚の相手方とするのは世間普通の事で、之れ誠に最も至極な事である、然れ共結婚以前から又は結婚の當初に於て直に夫婦たるべき男女の間に所謂戀愛の成立を要求するが如きは當を得たるものではない。夫婦の間に持たまほしき道德は夫婦關係の成立後に於てのみ實現し得べきものであつて、之れを其の以前に要求するのは、宛かも水に這入らないで水泳の稽古をするやうなもので、木に緣つて魚を求めると同じである。妻又は夫として己の理想に適合するやうな男女は此の世に極めて其の數少いであらう、又假令略々完全に近いものがありとしても相手が之れに應ずるや否やは知ることが出來ない、果して然らば己の理想に適合せずとも其處にある何物をか見出して結婚するのは世間の常態である、況んや人智は誤が多い、最初有ると思つた特定の條件は結婚して見たら無かつたことを發見する場合もある、の理想であり、其の秩序維持の要諦である、更に又社會國家の共同

之等の場合に離婚してよいとは吾人の道德意識は容さない。元來結婚は權利義務の關係を生ずる法律上の契約では無くて二つの全人格の融合に依つて一の意志的社會を創始するものであるから、男女が一度結婚により夫婦關係を創始したならば、其れは終生少くも相手方が死亡する迄は繼續すべき精神的關係であらねばならない。肉體上男子又は女子としての特質を缺いで居る場合は結婚の見地からは眞の男女ではないから結婚はあり得ないが、結婚後男女の性的特質を失ふことがあつても、離婚の原因とはならない、結婚の當初より相手方の性的缺陷を認容して夫婦關係を結ぶ場合も稀に考へられるけれども此の如きは極めて異數であらう。

夫婦は互に其の一心同體の理想の實現に向つて努力しなければならない、其の過程に於て如何なる盤根錯節が横はらうとも屈してはならない、況んや容姿の衰頽、財寶の消散、才藝の退歩などは毫も意とするに足らない。否、寧ろ之れに依つて夫婦關係は愈々益々其の結合を醇化すべきものである。其れは喩へて謂へば親子骨肉の關係のやうなものである、如何に生さぬ仲でも親子の關係を離脱する譯に行かない、親は子の爲、子は親の爲一身の利害を犧牲にして相互の完成發達を期すべく、夫に依つて親子の人格の完成が出來るのである。夫婦關係は血族的關係ではないが一の男の全人格と一の女の全人格との結合であつて、商業關係、友誼關係等のやうに人格の一部的關係に過ぎないものとは異なる、加之其の性的結合關係は骨肉關係にも見出されないもので、之れは血液關係に代るべきものである。前述のやうに夫婦は新に創められた一の人格であるから、一方の憎惡嫌忌に依つて夫婦關係を解消することは共同生活を無視する利己一點張の人生觀であつて取るに足らない、更に家の爲社會の爲に不利益な夫婦關係であるとして夫婦關係を解消し又は解消を强讀勸誘することは社會と個人との同一不離の關係を無視し夫婦の一心同體の人格性を沒却した暴君的の考である。然れば夫婦は離婚といふことを當初より眼中に置かないで唯一途に夫婦關係の理想に向つて勇往邁進すべく、此意識した勇往邁進其のものが夫婦關係の實體に外ならない。之れが夫婦道德の理想であり、其の秩序維持の要諦である、更に又社會國家の共同生活の圓滿な發達を期する所以である。利己主義又は暴君的態度でなくとも苟も離婚を容認するならば必然の結果夫婦關係は渾沌たる無秩序に陷るだらう、即ち夫は現在の妻よりも、妻は現在の夫よりも、夫れ〳〵より理想的な妻たり得べき女、夫たり得べき男を見出して其の都度現在の夫婦關係を解消して新に結婚するやうになつたなら、夫婦關係は美しいことは美しいがパット出てパット散る石瓰玉のやうなものになつて其の存在價値を消失してしまふであらう、之れ誠に忍び難いことである。

東京棋信

溝呂木光治

◎昨年十月から、『將棋の國』といふ雜誌を始めました。八段金易次郎君を主幹とし、小生等が每號執筆してゐます。

◎現代では、唯一の專門雜誌ですから、何んでも物にしたいと願つてゐます。

◎昨冬、木村義雄七段が、いよ〳〵八段に昇格しました。二十一歳の半名人、これは古今に類例のない、まア空前の一大出來事と存じます。

◎力强い將棋を差す人に、五段の飯塚君があります。精敏無双な指手に、金子五段があります。いづれも二十代の覇氣と英氣とが、盤面にあふれてゐます。それに比べると、木村八段の將棋は、老成の風があつて、どこを叩いても、鬪氣爭氣といつたものがありません。しかし大局に通じて、よく勝負の數を制することは、矢張り同君が、どこか天品の大きく、高いところがあるのだと信じます。

◎日本倶樂部では、將棋がはづみ、柳澤伯と、久米民之助氏が、東西の大關格、時計王服部金太郎氏が、小結といつた現況です。矢野恒太、中濱博士、永瀨久吉氏等も、仲々熱心です。

◎矢野氏、中濱氏などの將棋は頗る愛嬌があり、この間も中濱氏の桂の頭へ、矢野氏が歩と打込み唯だ取りと行つたのはいゝが、双方夢中で、パチ〳〵やつてる間にその歩がいつか向きを變へて、中濱氏の歩となり、斯くして將棋は中濱氏の勝となりましたが、あとで矢野氏その歩の方向逆轉を知り『ウーム殘念！これで負けた、これで負けた』傍觀者を顧み、且天を仰いで悲憤したなど、とても面白い手合せが、日々演じられます

思ひついたまゝ

丸山幹治

一、社會思想家のO君

O君は僕の某社以來の友人で社會思想家である。社會思想家といふよりは寧ろ社會主義的思想家と言つて了つた方が、話がわかつてよからう。僕の彼を知つたのは、彼が當時の我思想界を風靡してゐたデモクラシーの選手として、東大のY博士と並稱された頃であつた。彼はその文壇的名聲を非常に得意とし、Y博士に對する競爭者意識を露骨に僕達に發表してゐた新聞に長篇を書いては、社のツマラン男などに評判はどうですなどゝきいて、いゝ加減な謙辭を呈せられて嬉しがつてゐた。それ程にも彼は無邪氣な子供らしい誇負をもつと同時に、相手が誰であるとを問はず、自分のエラサを認めて呉れるものを喜ぶ男である。彼が學校騷動に捲き込まれW大學教授の職を拋つて新聞社へ這入つたのも、つまり此の小供らしい名譽心と、人に煽られ易いお人よしから來たと、僕等はすぐに見て取つたのである。そして彼が其の後デモクラシーから社會主義的思想家に『突然變異』したのも、直接の動機といへば、僕達と共にその新聞社を辭職する事になつた某事件に社會的反抗心を燃やした結果ではあるが、一つは、その頃にはもうデモクラシー的思想が稍人に飽かれて、文壇は方に社會主義的思想が跋扈してゐたので、彼の文壇的名譽心は、彼をそこまで引きずつたのではないかとも思はれないでない。さういふ關係で僕は東京へ歸つては一層近しくし、一所に或る仕事をやつてゐたが、彼の善良性は交ることいよ〳〵深くして、いよ〳〵わかつてくるのであつた彼は勇敢な傳統の否定者、偶像の破壞者であるに拘らず、彼を支配するものは、戀人としての細君が彼に對してもつ傳統的勢力であり偶像的權威であつた。彼の細君の何より彼に對して滿足するのは物質的のものではなく、彼の學者としての名譽、文壇人としての評判であるらしく、從て彼は少しも貧乏を苦にしない點に餘程の强みを有つてゐるのだが、細君の彼に欲するところは、彼の學者的良心、思想的信念に少々矛盾することさへ敢てせねばならぬ弱みを持つてゐるのである。人々よ、これは友人である彼を素破抜く僕の惡戲ではないのだ。僕は彼の人格のために、彼の思想家的名譽のために斯ういつて置くのである。それは外でもない、彼はなか〳〵の財産家であり、堂々たる邸宅に貴族的生活をやつてゐるので、往々彼の矛盾を非難するものがあるからである。その財産も實は彼が大に『增殖』したので、財産といふのは彼が遺産として受け取つたものから土地を買ひ、家を建てたところがその土地が大戰後の好景氣で十倍近くに暴騰したのである。つまり自然增加の不勞所得によつて、彼の財産の大部分は成立つてゐるのである。しかもこれは彼が思想的にやつた結果でないのは勿論である。ところが不動産的財産家である彼は、金錢上にはいつも不自由してゐる。その不自由のために彼の資本主義に反抗する氣分がどの位刺戟され、强調されてゐるか知れない、つまり堂々たる家屋敷に住むだけ彼の大學教授としての俸給や原稿料では暮しに足りず、彼に貧乏人心理を味はせてゐる譯である。それで彼の親友達が、彼にその地所の一部を賣つて貧乏から免かれさせやうと勸めてゐるが、さうして彼も一時はその氣になつて友人に少し許り屋敷の地所を切賣しようとしたのであるが、細君の反對で、それも破談にしたので後は依然として堂々たる邸宅に住みつゝ、堂々たる貧民心理を味ひ階級意識をイラだゝせてゐるのである。細君としては彼に金をもたせるのは危險である。小供のために何より賴みになるのは家屋敷であるから貧乏を忍んで、之を賣らないのである。そして貧乏してゐる事が、彼の社會思想家としての名聲を維持する所以でもある。即ち細君は、斯くして彼の財産を保護すると共に、彼の名聲をも保障してゐる譯である。何と彼女は社會思想家になくてはならぬ良妻ではありませんか。

京城雜筆

二、自分の矛盾

意識は鍍金であり、無意識は地金である。我等の生活面上に浮んでゐる意識といふものは極めて微弱なもので、無意識といふ狀態に降るに從つて、無限に展開するものである。何人も意識して行ふところはほんの僅かなものであとは意閾下に潜在する無意識に支配されるのである。尤も之に對して反對の心理學說もあるのだが、自分は自分といふものを解剖して見てやはり無意識の偉大な勢力を思はざるを得ない。例へば自分は盲目的に現代を肯定して新興階級の勢力を否定する人達と同じ考を持つことは出來ない。政治組織、社會組織の本質的缺陷を指摘したものを讀んで成程と思ふこともある。さうして自分の懷いてゐる道德觀念の如きも、現代社會組織を維持する必要上存在の理由あるものであると考へてゐる。それに拘らず自分の行爲を支配するものは、いつも陳るい倫理思想であり、道德感情である。だから勞働運動、社會運動に同情し乍らも、自分としては『資本家』の恩にも感ずる。あらゆる權威に反抗し、あらゆる傳統を破壞する一派の思想に相當興味をもち理解をもち乍ら、自分は彼等の社會的はた經濟的迷信とするものを捨てることが出來ない現代人の皮を冠してゐるが中味は全く黴の生えた舊思想が深く喰ひ入つてゐる。これは何といつても自分の生れた時代の平凡な人間として免がれることが出來ないのだらうと、安價な自己肯定をしてゐる。のみならず、自分の友達に大資本家でも出來るか大政治家にでもなるものが出來て、自分に頭を下げさせず、すきな仕事でもさせて呉れるものがあればいゝナなどと、虫のいゝことを夢想したりする。つまり自分にも出來さへすれば資本家になつてゐるかも知れない心理である。これは慥に意識であつて、意識と無意識の關係で說明するのは妥當でないが、然も極めて朦朧たる意識が、自分を支配する勢力は、却つて、はつきりした意識よりも強いことを思はせる。そして段々意識が薄くなるに從つて、人間を支配する力は強くなり閾下に沈降すればする程、その度合を加へるのではないだらうかそこで社會教化のことは、單に社會思想の上つ面の流れに著眼するだけでなく、國民的思想感情無意識的領分を健全化するに力を致さねばならぬといふ結論になるのである。

三、道德的感傷主義

涙脆ろいといふことは道德的意識が強いといふことを意味しない嫁いぢめの婆さんが、お寺では頻りに涙を流す。高利貸でも芝居ではむしようにに惡玉を憎む。だから安價なセンチメンタリズムの藝術的價値を否定される如く、道德的價値としても極めて低級のものだらうと思ふ。しかし自分は涙もろい性質をどうすることも出來ぬ。通俗小說を讀めば昂奮し、歌舞技を見ては泣けて仕方がないのはお目出度い自分である。それよりも最も自分の心をゆすぶり自分の涙腺を刺戟するものは赤ん坊の啼聲である。その聲こそ自分にとつては人間のあらゆる苦惱を壓搾した聲であり、人間のあらゆる運命を表徵した聲である。單調であつてしかも悲哀の最も深い最も複雜な情感に觸れるのもその聲であり、素朴であつて、しかも感情の限りなき嚴肅味を帶びてゐるのもその聲である。人間の過去現在未來を通じて同じ響を傳ふるその聲には人間としての最も根本的な、さうして宿命的な惱みを含んでゐると共に、文明人と野蠻人とを通じて同じ調子をもつその聲には、音樂としての最高の諧調があり、極致の律動がある。之を音樂的に享樂するといふのではないが、しかも自分は大人が赤ん坊の啼聲を厭ふ如く利己的であり、輕薄であることはないとさへ思ふ。無論自分としても赤ん坊の啼聲のために安眠を妨げられ、讀書靜思を妨げられて、一時發作的にイラ〳〵したことはないといはぬが、しかも如何なる場合にも、之をきいて一味哀切の調子に惻々として心を動かされないではゐられぬのである。少くともそれに含まれてゐる最も純粹であり最も眞率である人間の聲に對しては、都會的噪音、器械文明的噪音をきく時の如き俗念を離れ、油然として人間に對する愛を覺えざるを得ないのである。自分は道德的尺度に於て、餘り自分を高く評價することは出來ないのを知つてゐる。しかも假令如何に自分が卑しい感情と慾望とをもつてゐるにしても、自分はまだ赤ん坊の天眞の聲を感ずるだけのデリカシーを失つてはゐない。涙もろさを失つてゐない。これが自分の如き平凡人としては、道德的の最後

『突然變異』したのも、直接の動機といへば、僕達と共にその新聞

でもない、彼はなか〳〵の財産家であり、堂々たる邸宅に貴族的生

會社家

はありませんか。

京城雜筆

の陣地である。これを失はない限り、如何に世俗の濁りに染みても涙もて心の垢を流ひ清める作用が自然に行はれてゐると信じてゐる

四、小刻みの差別觀念

軍隊の如く上官下官の間に敬禮敬語のチャンときまつてゐるのは仕方がないけれども、自分は日本の社會が、あまりに無意味な階級を勝手に自他の間くつつけて、言語應待を小刻みに區別してゐることの煩はしさ、バカ〳〵しさからもう解放されてもよいと思ふ。いひ換へれば敬語の整理と共に一切の侮辱的言語などは廢語にして了ひたいと思ふ。水平運動のお蔭で一種の侮蔑的言語は此頃全く廢されてゐるのはよいが、まだ職業的にも或は階級的にも、いやな、しかも何等實質のない侮辱的言語が行はれてゐる。幇間の如き普通名詞として仕方がないものであり、またさういふ道德的性質の差別的若くは賤稱的言語は、飽迄存在の理由をもつのだが、俳優を河原乞食といふ類の侮辱語は廢すべきものである。新聞記者を新聞屋といふが如きも、その文字だけを見れば何でもないやうだが、しかし普通それには侮蔑的意味がくつついてゐるのである。尤も元錄時代に於て『貴樣』といふ語が敬語であつた如く、同じ言語の時代によつてその意味の反對に轉訛するものもある。新聞屋の如きも、新聞記者の地位が向上すれば、他日敬稱化しないものでもあるまい。『主義者』の如きも、此頃では少くとも知識階級の間に侮辱の意味に用ゐられてゐない。鄉土的侮辱語も面白くない。伊勢乞食、四國猿、さういつた類は多いが、封建的遺物として當然廢語となるべきものである。今でも何處の國の奴は陰險だとか金に汚ないとか言ふものがある。しかし江州人だから杉浦重剛翁が卑吝だつたといふのか。同じ兄弟でも上等と下等との人格的懸隔の甚しいのがあるではないか。然しそれより自分は世間の人が普通の言語態度に相手を小刻み的に區別づけるのは、その人物の小さく、卑しいことを示してゐると見てゐる。內地の官吏には大分さういふ風はなくなつたが、警官などはどうもさういふ風が殘つてゐるが、朝鮮では三矢氏が極て眞面目な人だけに警官の人民に對する態度が大分改まつてゐる。しかし此頃では民間のものに官吏よりも却つて威張りたがる風がある。少し許りの地位とか小金を持つてゐるとかいふので、何等の之に恩惠を感すべきものでない相手にまで、傲然たる言語態度を用ゆる輩が可なりに多いのを苦々しく感じてゐる。金錢價値を人生至上の價値とするのは、資本主義的現代に於て當然とはいへるが、しかも人格の自主獨立を認めるのも現代思想の基調である。金を儲けるの自由のみを知つて他の人格を尊重することを知らないのは恥づべきではないか。斯ういふ輩に限つて、少しく自分より地位があり或は金があり、その他利害の關係があるとかするものに對しては、見苦しい程ペコ〳〵するものである。また鮮人に對してまだ感心しない言語態度を用ゐるものが却つて市井の間に多く見受けるが困つたものである。威張りたくば大きく威張れ。左なくば誰にも叮嚀でなくとも、公平にせよ。彼の相手の年齡や服裝や聳の有無やを見て、或は敬意を拂ひ或はぞんざいな口を利く如きは、女郎屋の牛太郎と何の選ぶ所もない、さもしさの限りである。

五、東京

自分は東京生活のいかなる厭はしさをも厭はない程東京がすきである。それは東京は『成功』があり、富があり、榮達があるからではない、寧ろ東京が自分を放つて置いて呉れ、自分を自由にさせて呉れるからである。東京は自分の少し許りの虛榮心の滿足を決して認めては呉れない。その代りどんなに失敗のどん底にゐても格別輕蔑の眼を向けはしない。思ひ切つて欠伸をする事が出來るのは東京だけである。外では、すぐにあいつは欠伸をしたと言はれる。自分に探偵的の眼を向けて、どう斯うしたと言はれないのも東京である（それが一番自分は嫌ひである）自分は東京の缺點をも知り過ぎる位に知つてゐるが、それが堪らなく東京を好きにさせるのである。固より自分は東京を舞臺にして活動しようといふやうな稚氣から仕合せに見離されてゐる。東京を臨臺にしてエラクならうといふ野心からも、完全に切り離されてゐる文壇的名聲、フンそんなものは犬でも食へ。花々しい社交界、さういふところは十年も前から自分の方で愛想を盡かしてゐる。だが自分は東京に隱れることが、一番よい隱れ場所だと思つてゐる。自分の人生は暗いといふ程でもないが

左程明るくもない。しかし東京は疲れた自分を抱擁して、羽を休ま

るものが幾つもある。內地の大都會以外にはない科學者も幾つい

一書生として生活する呑氣を有さ

京城雜筆

左程明るくもない。しかし東京は疲れた自分を抱擁して、羽を休ませて呉れる。傷いた自分を介抱して時の力で癒して呉れる。認識を社會に求めず、世にも人にも無害な自己主義的生活をするには、東京の外に適當な處はないと思ふ。しかも自分はまだ働くだけの精力を剩してゐる。奮鬪するだけの健康も殘つてゐる。自分の我儘ばかりいつてはゐられない、家族のきづなもある。小さくとも向上の一路を望んでゐる。いよ〳〵絶望する迄には容易に失望しないで進んでゆかねばならぬ。唯自分はいつの場合にも、自分を迎へて呉れる東京を故郷としてもつてゐること、に安慰を感ずるのである。

六、纏まつてゐる京城

京城は小さい乍ら纏まつてゐる都會として纏まつてゐる。生活の舞臺として纏まつてゐる。否京城の如く純粹に消費都市としての面目を備へてゐるものは、米國のワシントンを除けば他に多くあるまいと思ふ。從つて都會的氣品は高かるべきであり、又實際に高くもある。先づその象徴的のものとして朝鮮神宮、昌慶苑などは全日本的の『名物』といふべきである。圖書館もあるし、運動場もある。消費の理想主義的方面は先づ整つてゐる。もの足らないのは芝居であるが、それも折々公會堂などで催される音樂會などで藝術的官能の滿足は得られる。更に消費機關の唯物主義的方面に至つても、それ程缺げたものはないのみか、人口に比例して寧ろ發達し過ぎてゐるものが幾つもある。内地の大都會以外にはない料理店も幾つかある。鬪者だつてさうバカにはならぬ代物がゐる。東京大阪に生活しても、これだけ手頃に何もかも纏つた文化的生活圏に自己を適應させる譯には、なか〳〵行くまいと思ふ。少くとも經濟上の限界効用的に、京城以上のものは、自分の生活には役に立つことがないと思ふ。しかも自分に、何よりも缺けてゐると思ふのは、社會的の寛大な空氣である。ユッタリとした氣分である。つまり京城の社會には廣さが足りないのである。社會層としては最高級より最下層までなか〳〵深さがある。立派な名士、學者、知識階級といふ貴重な層も存在してゐるが、それさへも餘りに廣さが足りない。從つて名士として納まるには都合がよいけれど一書生として生活する呑氣を有さつことが困難である。何處となくコセコセして、そして何とはなしに嫉妬排擯のいやな氣配を感ずるのは、社會層が深い割合に、社會生活が單調で、村落氣分が漂つてゐるからである。しかし是れは自分の淺い見聞から想像しただけで自分はまだ京城の全面目を知つてゐるといふ譯にはゆかない。自分としては、京城に多く求めるところはない、求めることは、自分の『安靜』の出來るだけ攪き亂されず、自分の適意が左程に妨げられないことである。自分の小さい巣だけを守つて、當分の間落ちついて暮したいことである。要するに京城が自分一人の小さな存在を餘りに邪魔にしないで、隅ッこに置いて、何もかまつて呉れないやうに、それを最も願つてゐる。

◇世間人間集

吉田莊一

◎馬野府尹といふと、あの通り立派な筆を有つてる人であるが、それだけ他の著作物に對しては、同情も深く、この間も或る男が、これを書きましたから御覽下さいと、一本を贈呈して居ると、『フーム、これは骨が折れたらう、たゞ貰つては濟まぬ、定價だけのものは取つてくれ』『イエ、金を頂きに來たのぢやありません』『イヤ〳〵、これだけの勞力に對してどうしてだまつて貰へるものか』しばらく押問答してゐたが、あとでその或る男『あゝいつて貰へると、もう本望です、金なんか入るものですか』

◎鐵道協會の岩本善女君といふまあ一種獨特のもち味に富んだ男といつていゝだらう。

◎酒好きで、飲み出したら、一晩でも、二晩でも、三晩でも、ブツ通しに、ちび〳〵やつて居る。

◎醉つて、喧嘩するやうな野暮天でなく、いつもニヤリ〳〵と、御機嫌のいゝことである。

◎あれで、朝鮮語の方は、一方の權威で、朝鮮史の造詣が深く、おまけに、健筆と來たら、酒と共に驚くべきもので、氏の『朝鮮上代史の裡面』などは、たつた一週間はどで仕上げたといふから驚く

◎京城醫專の棉引博士、講演には獨特のうま味がある。聽いて、頗る面白い、解り易い。この人釣が道樂で、支那へ行つた時など、太公望獨釣の遺跡で『フーム』

舊知の書信を寫して

芥川正

人生日々の出來事のうちで、舊友と久振りに會見することや又久振りに舊知よりの信書に接手すること杯は、確かに快事中の一つである、殊に其舊知よりの信書を思ひ掛けぬ他の知友が携へ來て呉れたと云ふに至つては、其信書は更に最も有意味に愉快に披見さるゝのは當然の道理である。

今茲に余が舊知と云ふは在東京の早瀨巳熊と云ふ杉浦重剛門下の一俊髦で、我國の領臺當時彼は官遊の身、余は相變らぬ浪々の老書生、互に基隆の風雨に浴し、臺東の塵埃を吸ひつゝ圖南の大業を談笑した一種風變りの親交仲間である、爾來二十四五年間、時に或は音信を通じたが、今回思ひ掛けなくも統營の知友服部源次郎君が、早瀨舊知の信書を東京で托せられて、之を釜山の余の寓居に送り屆けたのである、何んと云ふ奇緣、奇遇の結果であつたらう。

其信書に曰く、

滅法に錢儲けの上手らしい、貨殖傳中の男らしい伊勢の先生服部源次郎君に妙な處で出會したと云ふのは、同君の『支那粟毛』の終りに、老兄が釜山で同君の『支那粟毛』の勞を慰したと云ふ文字が紹介したのに因る。

九十歳迄生命があるとせば、今やお互に胡麻鹽頭になつて居るが、尙ほ未だ三十年は餘日のありそうなり、何うか胡麻鹽頭の服部君とも傍々御提携、東亜振興の素願を御貫徹祈り上く、小生も遠方から出來る丈けの犬馬とも行かぬ猫豚の勞を盡し可申候。

服部君は曰く、芥川さん中々財産が出來ましたなと、錢に緣の無さそうなと思ひたりし老兄が、遊俠傳中の傑物たるに加ふるに貨殖傳中の俊才を發揮されたるを甚だ痛快に覺え申候（芥川申す、服部君の意外千萬の御吹聽只々赤面のみである）

大震大火の災厄に遭遇し僅か一冊小生の手許に殘り居る天下の愚著『貿易研究』一冊を進呈す應接室か豪所かに轉がして置かれ度し。

噫芥川君、思へば天下何ぞ美なる事の多き、釜山の港、二見の浦、阿蘇の山、新高の峯打狗の岬、卑南の海、老兄の贈と老兄の文、余は大に醉へり矣。

愉快に書き流して居る、之を讀過した余は其餘りに余を揚げ過し、或は余を貨殖傳中の俊才などと途方もない方角違ひの推賞まで受けて赤面千萬であるが、併し舊知早瀨君が謙讓して猫豚の力を盡すべく誓言する東亜振興論の如き是れ固より余が同志同憂の士と提携して今後に倍々努力し精進すべく期する所である。依て余は茲に信書を寫して敢て新年所感記事の御注文に應ずることにした。

◈江湖風聞錄

石川利夫

◎東拓の庶務課長志村さん、本店の監査の方に變はる、お名殘り惜さにたえない——但し歌信は、これまで通り東京から頂ける筈。

◎後任は、まだ未定ださうなどうか志村さん同樣、詞藻豐潤な士を、迎へたいものだ。

◎醫家の小林千壽氏と、伊藤憲郎判事とは、高等學校時代同窓で、至極昵懇であつたが、双方肝膽持ちて、何かの行違から今は疎緣の間になつて居る。

◎それを氣にして居るのは、同じ醫家の瀨戸先生『この正月は、一芝居うつて、兩おこりん坊を、一つアハ、、、と笑はしてやる』と、手ぐすね引いて待つて御座る。

南滿北滿の旅

福田有造

寢臺車の夢は鴨綠江の橋音で醒めました、まだ九月中旬なるに肌寒さを覺えました、國境を渡ると氣分が全く違ひます、何とも云へない氣持がします。安東縣でうんと蒲卷、兩切、金口を買ひ込んで摩天まで煙の吐きどうしです。それですつかり喉を痛めました。安いといふ事實が喉を痛めさせたのでしよう。廣い大きいと黃塵……それだけで滿洲はつきてしまひます。

埃の多いのには驚きました、北陵も見ました、長春も見ました、ハルピンも見ました、いゝところです。夜のハルピンは旅行者の憧れだそうです。まだ見ない人は想像が逞ましくする方がいゝと思ひます。現實にぶつつかると悲哀を感じます。帝政時代のハルピンと現在のハルピンと、國は強くなければなりません。外國を歩いて自國の勢力の強大なるを熱望しない旅行者はないと思ひます。國亡びて山河空しく殘る、この事實は度々歷史によつて繰り返されて居ります。

露西亞人と支那人との位置を考へる時は泌み〳〵と榮枯盛衰と云ふことを考へさせられます

野性に富んだ露西人を面白く見ました。頗る呑氣らしい姿を見ました。徹底して踊り狂ふシーンは想像の外です。

何故か胡砂吹く彼方思はるゝハルピンの夢ガバレーの夢

歐露に連るハルピンの驛頭に立つて藤公を思ひ起し、日露の戰ひにウラーの聲高らかに南下した時の狀況も思ひ起されて、運命の皮肉なる戲れに感懷を催し、亦最近に赤白の勢力爭ひにカラハンの通過を送つた驛頭！旅人の感慨は無量で新なる感想を呼び起させます。

勝利の悲哀も戰敗の悲哀も結局同じ道を歩んだ人類の爭鬪の繪卷物に過ぎないと思ひます。

大連も見ました、そうして朝鮮へと逃げて歸りました。二週間の遊覽氣分で見聞した所は多々ありますけれども、ハルピンを面白く見た丈でとゞめます。

唯北滿南滿を見聞して支那人に對する考への相違して居ること、それと同時に日本人の立場は大に考へねばならなりと思ひます。

◈無駄ばなし

平田久雄

◎この間、辯護士を初めた山口均四郎君、男は小さいが、仲々利かぬ氣の先生である。

◎話は五六年前のことになるが、或る日或る旅館から、自動車に乘らうとすると、あとから來た一名の警視、失禮とも何ともいはずに、お先に、一番いゝ座席へ、どつかと陣を据える。

◎『オイ、君、失敬じやないか』と、喰つてかゝると、『オイとは何だ、おまへは何者だ』警視先生も、仲々鼻つ張りが强い。

◎『何者とは何だ、君は禮儀を知らんか』とう〳〵大喧嘩となる。泣きさうな顏をしたのは自動車の運轉手、あたりは黑山のやうな人だかり『やつとる〳〵、オイ、皆喧嘩を見に、來い〳〵』

◎とう〳〵双方名乘りをあげて見ると、一は曰く、京城覆審法院判事山口均四郎、一は鐘路警察署長警視長野清……。

◎『フン、覺えてゐ給へ』ふたりは捨ゼリフで別れる。

◎半年ほど經つと、山口君、咸江地方の豫審係となつて、北へ行く。その辭令が新聞に出ると『御榮轉、おめでたう、いづれお目にかゝる』スグ電報を打つて來たのは、當時咸南警察部長の長野君。

◎爾來、ふたりは肝膽双照、相會しては、盃を嘗めたが、醉うと、兩方で『あの時はのう、こいつが〳〵』

御挨拶

時實秋穂

私も宴會や酒では相當高名になつて居る、それ丈京城は各種の宴會其の他人の集合する機會が相當に多い、隨て色々の場合に色々な御挨拶を承る、自分も時々引出されて所謂御挨拶をさせられる、新聞や雜誌に御挨拶の批評の出ることも少くない、やれ上手であつたの下手であつたの、長かつたとか短かかつたとか色々問題になる、元來所謂御挨拶は多くの場合、纏つた意見を條理を立てゝ演述すると云ふよりは、寧ろ其の折の氣分を云ひ表はすことになるので、實は中々六ケしい、其のときの周圍の事情をも考へねばならず、相手方の出方にもよることで、千篇一律に長短を云々する譯にも行かねば上手下手もさう輕々しくは決せられぬことゝ思ふ。

新年の御挨拶、それは太抵定つて居る、明けまして御愛でたう、相變らずと云ふのが、普通である誰かの云ふた樣に、別段前日前夜と變つたと云ふ譯ではないが、一夜明けると何となう愛でた相になるのが新年の氣分である、相變らずと云ふよりは、大に變つてと云ふた方が理論上はよからうとも考へられるが、相變らずと云ふ言葉には無限の意味がある、むき出しに云はぬ所に却つて趣があるはせぬかと思ふ、同じ御愛でたう相變らずも、田舍で子供のときに經驗した、夜も明け離れぬ内に、村の人達が若水を汲みながら、其處彼處で異口同音に云ひ交して居る有樣は、公會堂の名刺交換會などで聞くよりは、何となく物懷かしい感がする、相變らずと似た樣なことで、送別會又は留別會の席上で普通には幸に在職中大過なく相勤めましてと云ふのを、在職中實は大過數限りなくあつたに拘らずと云ふ人がある、鳥渡目先が變つて面白いと見えて、之に倣ふ人もちよい〳〵見受けるが、何うも本人とて眞實さう思ふて居る譯ではなからうし、矢張人並に、皆樣の御援助で幸に大過なくと大人しく出た方が奥床しい感がする、奇拔な所は先づ考へ物と云ふべきであらう。

度々聞いた御挨拶の中で、凡てを文章に認め、終に臨むで杯を上げて閣下並に各位の御健康を祝します迄朗讀したのがあつた、私は少々離れて居つたので氣が付かず只少々早口で流暢過ぎるナと思ふた位であつたが、後から話を聞いて分つた、人の評判では、隨分人を喰ふた話であると云ふことであつたが、勿論之は立派な人の御挨拶であつたし、斯樣な藝當は鳥渡凡人では出來ぬと感心した、一體公の席で長者を前に置いての挨拶は、凡て之によるかよらぬかは別として原稿を持つてするのが本當であると云ふた人がある、或はさうかも知れぬ、尤も普通の人が遣つたのでは、當世俗受けのせぬことは必定である、原稿を持つてと云へば、西洋人を招待した席上で外國語で綴つた挨拶文を朗讀したのを一二度聞いたが、生憎其の人は餘り上手でなくて、思はず汗をかゝされた、下手な外國語の御挨拶も時にとつての御愛嬌で、客人に好い感を與へることもあると思ふが、公の席上などには、下手な人は矢張自分の國の言葉を使ふて通譯して貰ふた方が無難で、又却つて氣が利いて居ると思ふ。御挨拶痛み入ると云ふ言葉があるが、實際私も痛み入る御挨拶に接する事が日常少くない、朝鮮に來てから時々初對面の挨拶に、閣下をば私は親の樣に思ひますとか、兄さんと思ひますとか云ふ樣な事を聞かされる、先方は善意であらうが鳥渡痛み入つた感がする、貴方は何うも內外御評判がよくて、誠に何うもと思ふ存分おだてゝ置いて偖てと相當無理な御註文を承ることもないではない、之にはほと〳〵痛み入る、それとはちと方角が違ふが、新任披露の席などで、此の度は御愛でたうと挨拶し、又口には出さずとも其の積りで居つて誠に今回の就任就職は一身に取つて光榮に存じますと來さうなも

るのが新年の氣分である、相變らずと云ふよりは、大に變つてと云ふた方が理論とはよからうとも考げて閣下並に各位の御健康を祝します迄朗讀したのがあつた、私は少々離れて居つたので氣が付かず口には出さずとも其の積りで居つて誠に今回の就任就職は一身に取つて光榮に存じますと來さうなも

京城雜筆

のと考へて居る所へ、私は此地位は別段名譽とも思はず光榮とも思ひませぬが、已むなく引受けましたと御挨拶を受けたときには、何となく之は恐入つたと云ひ度い氣持になる、假りに自分ではさう思ふても矢張、光榮に存じます、果して此の重任が充分に勤まりますか何うかと云ふた方が、職務重責の上からも素直でよからう、又其の爲に御本人の相場に別段影響もすまいと思はれる。

曾て御挨拶に馬鹿に美辭麗句を挿入する癖の人があつた、聞けば御本人は其の爲に相當苦心して作り上げるのであるさうであつたが案外世間の評判はよくなかつた、私の聞いた所で、さう下手とは思はず、初の間は興味を以つて聞いたが、度重なるにつれて聊か鼻に付いて來て、又かと云ふ感がして居つた、世間の人の評判も此の邊から來た結果かと思ふ、考へて見れば私も中學時代に、文章を作らうと、盛に文語粹金だの美文の資料などを漁つて、形容詞たつぷりのものを書いて喜むだ事がある、後には懶くなつた爲でもあらう、又實際自分の思ふ事を其の儘相手方に傳へるには、餘り立派な他所行の言葉よりは、お國訛りの使ひ馴れた言葉の方が都合がよいのと同樣、平生通りの裝飾なしがよい樣に思はれるので、今では之等昔の御馴染の書物には用事がなくなつた、此の點から、時にはよからうが概して云へば、御挨拶もこつてりした御料理よりは、茶漬さらく〳〵の方が氣持がよく、何度聞いても厭氣がさゝぬ樣に思はれる。

新年早々理屈つぽいことや惡口はよい加減にしたがよからう、それよりは先づ大人しく、新年はお愛でたう本年も相變らず、終に本誌の御發展と同人各位の御健康とをお祈りして置きます。

歲晚雜詩

清谷惠眼

吊故下岡總監

偉人在策蒞鷄林。超越利名重大任。今日英靈魂不返。
全鮮民衆斷腸心。

題髑髏之圖

色即是空箇髑髏。不知魂魄底邊留。秋風颯々月明夜。
唧々虫聲曠野頭。

歲末所感二首

乙丑年華今將除。人生如夢亦空虛。歸眞離俗吾心事。
回顧當時感有餘。

再入教團過一年。大悲傳化法城前。愧吾薄德非才質。
管託佛緣說願船。

丙寅元旦

旭日曈々四海鮮。迎春五十亦三年。光明界裡新生活。
念佛一聲歡宿緣。

恭賦

朔旦曉風淑氣鮮。老杉林立拂塵煙。河流清淨社頭外。
拍手遙聞橋上邊。

◇運動界漫語

平田久雄

◎この間、木浦の福田氏が、朝鮮ホテルへ來て居るので、どんな用事かと思ふと、ナーニ『ゴルフ』をやりに來たんですよ……。

◎氏は、木浦には、その設備がなく、また相手がないので困る。これから、稽古に、京城まで出向きますよと語つて居た。

◎大邱といふところは、妙に運動に力を入れる處で、野球などになると、全市商賣も何もそち除け現にゴルフ場なども、他に率先して作つて居る。

◎といへば、一昨年ごろ、菊田君の手で作つてゐた運動雜誌、一時休刊してゐたが、舊冬からまた復活した。

◎何んでも向ふ一年間發行を保障する特志家が出たとかで、菊田君大喜び。無論これほど盛んな運動界だ。機關誌の一つ位は、なくては叶ふまい。

◎野球で、全州軍といふと、一際光つて居るが、これは亥角前知事の置土產の一つださうな。

續全南和順雜記

市村毅

【三二】

◎ひと時目ざめる樣に鮮かな彩りを以て、吾々旅人の眸を樂しませて呉れた樹々の黃葉、紅葉も、いつか色褪せ又は大方散り盡してどうやら此全南の天地にも冬の面影が見ゆる樣になつた。まだ北鮮あたりの今日此頃の樣に氷も張らぬし、雪が降るまでにはならぬけれども、朝毎に地上を染める霜や日毎に枯れて行く草葉の色を眺めやつては流石に凋落の悲しみを覺えずに居られない。つい先頃まで引續き晴れ亘つて居た空も今では稍々もすると曇り勝ちで、針の樣に尖つた細い枝先まで露き出した木立や竹藪を淒慮會釋もなく搖がして行く風は時折雨さえ誘ふ樣になつた。

◎リンドウや野菊などの秋草が咲き亂れて居る頃、野山のそちこちで唄ひ續けて居た松蟲の聲も昨今はサッパリ耳にすることが出來なくなつた。又あれ程頻繁に出沒して居たヤマカゞシや縞蛇共も愈々地下にその姿を隱したものか全く目につかなくなつた。それにしても何と言ふ慌しい自然の移り變りだらうか、實際此頃山路などを歩くと、風の吹かぬ日にはヒッソリ靜まり返へつて居て、いやが上にたかぶる神經は雉子や栗鼠などが枯葉踏み分け逃くる音にも、又小鳥の群が枝から枝へと飛び移るさやかな音にも思はず耳傾けさせる樣になつた。

◎野山の寂れ方もさることながら近頃は何處の村里へ行つても同じ樣に殺風景な感じを與へられるだけである。到る處重そうに生り下つて居た美しい柿の實が殆んどもぎ取られてしまつた後はそのいかつい眞黑な幹や枝に朝な夕な群り集るカサゝギの姿のみが殊更目に立つ樣になつた。若し太陽が沈もうとする頃などに斯うした村里の附近に佇んで居るならば、何處からともなく寄つて來る無數の烏が空高く鳴き交はす聲やその羽音さては竹藪のねぐらへと急ぐ山鳩の姿に至るまで何處か淋しい影が著き纏つて居るのをそれとはなしに感ずるに違ひない。

◎それにしても國境あたりで經驗し得る今頃の陰鬱な氣分と凜烈な寒さとに比べると、全南殊に和順などは何となくすべてが明るい然も平和な感じがする許りでなく到底北鮮あたりを旅して居たものにとつては想像も出來ぬ位に暖い土地の樣に思はれる。山谷間の隅から隅迄開墾されて作り上げられた豐饒な稻が刈り終つた後に續いて蒔かれた麥は直ぐ樣芽を吹いて早いのは既に三四寸程も延びたものさえ見受けられる。スッキリと晴れ亘つた日などに斯うした場所を歩いて居ると、今にも蒼空のどこからともなく雲雀の聲が聞えて來そうなのどかさを覺ゆることさえある。

◎そうした春の樣な日のあるに迷はされた故か、そこらの岩山へでも登つて見ると、岩塊にしがみ付く樣にして生えて居る山つゝぢが一つ二つ氣まぐれな花を開いて兎角凋み勝ちな、そうして痛ましい氣な薄紅ゐの花びらにはそれを慕ふて來る虻や蝶の代りに痩せこけた赤蜻蛉がとまつたりして居るのを認めるであらう。

◎然し斯うして思ひの外暖い日の多いのもそれはこゝ當分の現象かも知れぬ、秋から冬へ、凋落から荒涼へと大急ぎでその姿を變へてゆく野山にはやがて雪がチラ〳〵舞ふと共に風が恐ろしい唸り聲を立てる日が來ることであらう天雲山や聳巖山などの峨々たる岩山が眞白く彩られて、陽にまばゆく輝き亘るのを見上げ乍ら旅の溫突生活を樂しむ日も遠くはあるまいと思ふ（一四、一一、一六記）

京城雜筆

◈うわさの人

平田久雄

京城高商の鈴木校長は、有名な嚴格な人で、生徒の父母が訪問してもメッタに面會しないと噂されて居る▲ところが、私人としては、非常な親切な人で、生徒が病氣だとか何とかいふと『アレはどうだらうな、大丈夫かな』と。頻りに受持教諭に訊く▲御自分が弱いだけに、思ひ遣りも深い▲それからモ一つ有名なのは卒業生の就職日に就て、いかにも心配して居ることだ▲毎年その季節になると、勞を厭はず、繁を避けず、それは〳〵熱心に奔走してやる。

御覽下さい

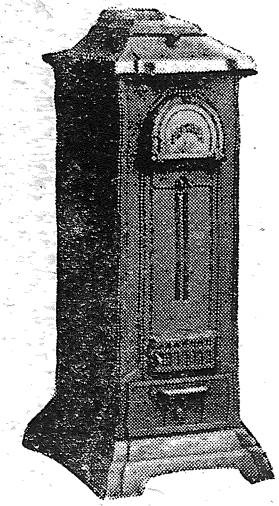
煤煙防止

完全燃燒無煙裝置

新許

發明の權威

石炭煉炭を焚いて完全燃燒し
絶對に無煙となる。
煙突掃除を要しませぬ



型錄送呈

京城龍山驛前
宮崎組本店
電話龍山八四二番

京城本町三丁目
京城販賣部
電話本局二八八九番

毎月煤煙防止無煙裝置の
實驗を御覽に供します

どが枯葉踏み分け逃ぐる音にも、
又小鳥の群が枝から枝へと飛び移
るさやかな音にも思はず耳傾けさ

晴れ渡った月がとし
を歩いて居ると、今にも蒼空のど
こからともなく雲雀の聲が聞え

勞を厭はず、繁を避けず、それは
〳〵熱心に奔走してやる。

富永式特許煖爐
大賣捌店
青々園茶舗
京城本町二丁目

市内明治町二丁目
内科
小兒科
中島病院
院長 中島貞信

市内明治町二ノ一〇五
榎本法律事務所
辯護士 榎本隆

市内永樂町二丁目
木戸齒科醫院
院長 木戸虎藏

市内明治町二ノ七五
利根川齒料醫院
院長 利根川清治郎

市内旭丁二丁目
外科
皮膚科
瀬戸病院
院長 瀬戸潔

市内鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

秋から冬にかけて、人參を飲用すると、最もよく利くものだと昔から言ひつたへられて居ます、古人のいふことにウソありや否や、兎に角一度おためしのほど願上げます
京城本町二丁目
專賣局參葯
一手發賣元
貴生堂
電話本局一三八
振替京城七六一

高級
京染
（新柄見本到著）
京城本町三丁目
きらぎ屋
電本三〇六八
振京五八三

市内吉野町一丁目
内科
小兒科
木村醫院
電話本局七二五

頭の先より足の先まで

と云ふ趣意にて洋裝に必要な附屬雜貨部を開設致しました、實用向から高級品迄ズット取揃へ、確かな品を極めて薄利で御便利に御提供申します、何卒『丁子屋の洋服』同樣御評判の程御願申上げます。

▲雜貨部品目

帽子、ワイシヤツ、カラー、ネクタイ、ボタン類
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首卷、ズボン
ツリ、ハンカチーフ、小供セータ、下着類

毛布新着

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙
日本毛織特製茶毛布各種、寢具用として必需品

京城南大門通り

丁子屋洋服店

電話本局 長二四六三 二二九七 三〇九二 番

休日無し毎日夜九時迄營業
御用の節は店内雜貨部御呼出被下度
市内は御一報次第現品持參貴覽に供し申候

通俗講話

津田常男

ラヂオの話を簡單にしてくれといふ注文が時々ある。造詣の深い話となると困難であるが、簡單な話なら樂に出來るだらうと思ふのは、一應の理屈である。併し折角の話であるから出來ることなら、誰にでも解るやうにしたいといふ考でやることになると、豫期の結果はなか〳〵得難い。よく考へて見ると之は始めから無理な注文なんだ。聞く方では、聞いて見るまで話を聞けば何程かの譯が直ぐ解つて、空腹に飯でも食つたときのやうに効果があるもの位に思つて居る。詰り常識の延長で話が解るものと漫然考へて居る。言ふ方でも成るべく常識の延長で話を片付けたいが、どうしても肝心の處になれば、常識から一歩入つたものを持つて來なければ話にならない。この點を省略すれば全然の骨抜になつて最初の目的を失つて了ふことになる。それでは折角の希望に對して濟まないと思ふから、出來るだけの努力はして見るが、その努力の前途には屹度前述のやうな不安を除き得ないのである。ラヂオの話といふのは一例に過ぎないが、獨りラヂオの話に限らず、一般に學理的な話を通俗講話によつて解り易くしやうといふ困難はこの點にあると思ふ。之を興味本位のものにしやうとすれば、現象の背後にある理論を抽出しないで、五感に訴へ得る現象の羅列を以て新奇な知識を少しでも授け、恰も理論の一角に分け入つた如き感情を聽衆又は讀者に與へることである。之は極端にいふと言ふ方の側にとつて多少良心の麻痺を必要とするものである。通俗講話を避けたい心理はここに胚胎する。

尤も、通俗講話を要求される動機を推察すると更に思ひ半ばに過ぎぬ場合がある。それは、或る事を知りたいといふ衷心の欲求がある如くで、その實その事は或る何等かの背景になつて了つて、實際は內容の如何に關せず、形式上そんなものが持出されればよい場合である。恰も床の置物、机の上の花瓶の樣な役目をさせられる場合である。そんな場合にも、出來るだけその機會を利用して、通俗講話の効果を多くして置かうとする勞力を盡して見るべき場合と、情勢によつては、顧みて他を言ふ式に體裁好く其場を繕つて置く方がよい場合とがある。

何れにしても、通俗講話といふものは啓蒙手段としても、ほんの荒地に鋤を入れた位のもので、之から土を耕し、水を灌ぎ、肥料をやり、種子を蒔き、芽を出し花を咲かせ、實を結ばせるまでには、前途頗る遼遠なものだと思はねばならぬ。する方でもその心算ならば、聽く方でもその心懸けで、自らの期待といふものを吟味してかゝらねばならぬ。そこまで御互に話が解つて居れば、通俗講話も却つて最大の能率を得るだらう。拍手音を發するに非ず、双手相拍つて始めて音が出る、この事の當嵌るべき場合は澤山あるが、通俗講話といふもののこの例に漏れないと思はれる。

◈よもやま錄

石川利夫

◎京日の丸山主筆といふと、名文家を以て、一般から許されて居る人だが、氏の原稿と來ると、寔に以て、はや難儀なものである。

◎新聞の聞の字は、たゞ門と書いて、片づけてある。新門々々、何だらうと推讀すると、新聞ぢや君といふ字は、どうしても差としが讀めない。家と豕、山と小、萬事頭でやらないと、とても一行も下らない。殊に假名と來たら、全然暗號だ。それでゐて、活字になると、あの通り朗々珊々たる名文字になるんだから不思議。

◎氏は、信州の生れ、山岳國の氣稟を、明に多分に有つて居る。といふと、やはり一流の文章を以て、讀者をうならせて居る大朝の井上氏も、やはり信州出身。

◎但し井上氏には、江戸ッ兒的氣稟が大分に多い。清貧の中から人の世話をし、損耗をしないでは居られぬ男。

正月と旅行

淺川伯敎

私は旅行好きの方で、仕事に苦しく成ると、何とか、ぐめんして旅に出掛けます。丁度冬眠から覺めた蛙の樣に、當度がある樣の無い樣の旅の生活の中に世の中の色々の有樣に觸れたり、しみ〴〵と自分を見つめる機會を與へられたいからです。或る時は大きな氣持に成つて、總ての世の變轉を客觀的に見て鋭い批評の語が胸を突く時もあります。又蟲けらの樣に自分が見えて獨り廣い野原に投げ出された何の力も無い者の樣に考へさせられる事もあります。又古跡や知らない海岸に立つて大きな運命に抱かれて、今の自分がこの地に來た攝理の不思議さに打たれ奇麗の心に成つて一人涙を催す事もあります。たまには一等旅館に宿つて少しは錢を持つて居る樣の顏をしたり、又或る時は木賃宿にえたいの知れぬ客たちと一所に遲く迄語り明かす事もあります。宿屋では大體私の心は落ちつきません茶代などが少いと出る時の宿屋の人たちの冷い顏が一日中頭の隅の處にくつついて、其の日の行程がどうも面白くありません。又隣の部屋で男の客が二三人で女を擧げて夜中さはがれでもしたら、始の中は好奇心で小說でも讀む樣に少しは面白いが段々無遠慮に露骨に成つて來るのが手に取る樣に見えると不快でたまらなく成ります。はては男の家族の事や、女たちの未來の事迄思ひ出されて、これから生れて來る色々の結果迄、あり〳〵と見える樣の氣がして、むつくり起きて宿屋を出やうとした事もあります。

知人の家で溫い好意の中に家族の一員として取扱はれる時が一番氣持がよいですが『この家では迷惑では無いか知ら』と思ひ出して來ると、何だか氣兼が增して來る時もあります。結句安い宿屋に宿つて晝食などは、そば屋の盛位で濟す時が、一番氣が置けぬのみならず、心殘りが無く勝手の事を考へて居れます。

大正十二年の十二月三十一日の夜に九州の海岸を歩いて見たいと思ふて、夜中に家を出ました、處が汽車に乘り遲れて、除夜の鐘を聞き乍ら又家に歸りました。元旦の朝一番で家を出て、二日の夜明けに九州博多につきました。停車場から博多の海岸に行くと、丁度日の出の時刻でした。今年は幸運であれかしと祈る心に成りました靜かな海岸を行來して、古い陶器の破片を拾ふたり元冠の遺跡を見たり、遠い過去の歷史的追想にふけつたりして海岸傳ひに、當もなく歩いて正月三日の一日を送りました。其昔使用された文化の蹟が陶器の破片と成つて、この古い土地に托されて居る事を思ふと、追想はそれからそれへと止めどもなく、湧いて參ります。諸越の船が茲に集り、色々珍妙のものがこの地から都へと送られた事、越羔の青磁の破片もあれば、高麗羔の青磁の破片もあります。築港の爲めに海底から擧げられた土の中には澤山のかふした破片のあるのに驚きました。今日總べての文獻が假に失はれたとしても、この地中に托された各種のものは永く雄辯に其昔を物語りませう。唐人の屋敷もあり、高麗人の町もあり、又海賊等の散財所でもあつたでせう。而も我國諸宗の發生の地とも考へられます寺に扶桑最初の禪窟と云ふた樣の御筆があるのも其れが爲めでせう。宿へ歸りに本屋をのぞくと、近松の博多小女郎波枕と云ふ海賊を題材としたものがあつたから買つて來て見ました。

三日の晩夜行で鹿兒島に立ちました。ぐつたり眠つて、夜明けに霧の中を汽車が高原から鹿兒島の平野に降つて行く時は不思議に崇高の感に打たれました。停車場近くで梅の蕾を見たり、常綠木が生へ茂つて中に石で固めた樣の家々を見ると、鹿兒島人を思ひ出します。正月の鹿兒島は、薩の海軍と云はれるだけに、歸省した將校の家族らしい人が一等室に幾組も見えました。皆慇懃に挨拶して、丁寧に詞を交す樣は茲でないと見られません。南方の血液が多いと見えて婦人は色が黑い方です。磨き上げた將校の奧樣は一寸周圍に似合ひません。四日は町の見物をしました。五日に帖佐と云ふ所へ參りました。茲には古い羔跡があります。古帖佐と云ふて今の薩摩燒や龍門司燒の前身です。竹林の中に鐵釉の破片がから〳〵して居ました。どこか周圍の感じが南鮮の羔業地を思はせられます。六日に伊東窯に參りました。茲の部落は

【三八】

まゝです。全體として朝鮮のにほひがただよつて居ました。羔業に用ひる器具の名稱なども、朝鮮の

のぞき歩きました。次から〳〵とダ方迄に十二三軒歩きました。矢

京城雜筆

した。どこか周圍の感じが南鮮の窯業地を思はせられます。六日に伊集院に參りました。茲の部落は全部朝鮮人の子孫で島津公が連れて行かれた十七姓の異つた姓の陶工の一集團は三百年來茲に他とは結婚もせずに、陶工の仕事をやつて來たのです。朝鮮語の教科書もあり、檀君を氏神に祀つてやつて來たのです。沈正彦君の家に參り色々厄介になりました。沈正彦君はこの地では庄屋樣の家です。先祖薩摩に渡る時用ひた簡單の朝鮮式の衣冠が今も保存されてありました。齋藤總督が行かれた事や加藤さんが視察に行かれた事など話して居られました。沈正彦君に案内されて處々の仕事を見せて貰ひました。土管や壺やしようちうじよかを作つて居る處は朝鮮式そのまゝです。全體として朝鮮のにほひがただよつて居ました。窯業に用ひる器具の名稱なども、朝鮮の語を其まゝ殘されて居ります。茲では古い薩摩燒を『火ばかり燒』と云ひます。それは陶工も陶土も朝鮮のものであるが火許りは薩摩のものだと云ふ事だ相です。其夜鹿兒島を立つて長崎に向ひました長崎の和蘭陀屋敷、切支丹の古跡黃蘗の寺、混血兒、カステラ、ボニカンの砂糖煮、唐人屋敷、踏繪など、以前からこの地の事を忘れられませんでした。

七日の朝長崎驛に著して驛の賣店で町の地圖を買ひ、待合に居つた知らない坊さんに賴んで、長崎の骨董屋のある處を、坊さんの知つてゐるだけ、教へて貰ひました そして町内の骨董屋を案内無しでのぞき歩きました。次から〳〵と夕方迄に十二三軒歩きました。矢張長崎は居心地のよい處です。道を問ふても極親切に教へてくれます。大底の町で道を聞くのに今日はと云ふて入つて訊くと商人の人は客だと思ふ豫期に反して親切に教へてくれぬものです。そして大底變な顏をするものですが、長崎は丸で反對です。大底、店先きへ出て教へてくれます。龜山燒の窯跡やら、離れた長與の窯跡やら、土地の燒きもの研究家について色々の標本を見せて貰つたりして居る内に、切支丹關係の長崎の歴史に興味を持ち、遂根掘、葉掘り色々の處を訪ね廻つて八日程茲に止りました。

ぼつ〳〵錢はなくなるし博多以來の破片の標本が澤山に成つて、荷物が多くなると旅は面白くなくなるので、遂歸る事に成りました 歸りに有田に寄り朝鮮の歸化人李三平の百間窯跡を見ました。

博多に三日程友人の所で厄介になり月の半に家に歸りました。九州は案外地方的色彩の變つた處で博多、鹿兒島、長崎、佐賀と見た處だけでも總べての氣分が隨分異つて居ります。長崎の事は折を見て書いて見たいと思ひます。

◇愉快な先生

吉田莊一

日之出商業 補習學校の大山校長（一夫氏）といふと、教育家に珍らしく人間味滿々たる先生▲義太も解る、謠も解る、芝居も解る、先生何でも知つて居て、酒も相當行ける、少しも聖人振らないで、それで、立派に部下を悦服させて居る。

南洲禮讃

吉田直

私は大西郷を偲ぶ一人である

あの沈著にして無言な態度、あの底力のある國家的觀念、あの維新大業の意見破れた時の熱血に燃ゆる反抗、あの宇宙を呑む偉大なる眼、數へ來れば、數限りのない偉大さである。

明治十一年南九州の熊本を中心として南に八代、北に田原坂東に阿蘇、西に長洲、渡の如くに押し寄せた官軍に包圍された彼は八代の守護、遂に敗れたのを知りじり〳〵と田原坂迄の退却を餘儀なくされた。

而し彼は別段功を急ぎもせなかつた、小銃彈の散る中で靜に詩書を繙いた、彼の筒袖著物には煙硝の匂ひがしたが、彼は從容として弱音を吐かなかつた。後田原坂も敗れてから彼は巨大な胸に溢るる愛國心の命ずるがまゝに四五の血に逸る青年に守られて南國、城山に身を隱して靜かに默考した。

天運は徐々に維新の先驅を葬るべく不世出の英雄を苦しめた彼の自害が傳へられた時官軍の谷干城も大粒の涙を呑んで死を悼んだと云ふ。

英雄の末路は何と云ふ靜淨なものであらうか。

時代は移る彼が大志は殘されて明治から大正へ、其の偉業は今や成り上野丘上に天下を睥睨する彼が立像を眺むる時今更乍ら感慨深からぬものがあらうか

上古の朝鮮神宮

岩本善文

【一覽く

これが新羅の朝鮮神宮であります、次は欽明天皇の十六年、百濟の威德王が其父聖明王の戰死並に新羅との交戰に敗北の報を齎して其救濟を我朝廷に賴んだ時、大臣蘇我稻目は其使臣に諭へて言ふ。

昔大汨天皇（雄略）の御世、頗の國高麗に逼られ、危きこと累卵の如かりき、是に於て天皇神祇伯に敕し、敬つて策を神祇に受く、祀者即ち神語を託けて申さく、建國の神を屈請し、往いて亡びなんとする國を救はゝ、必ず當に國家靜謐、人民安泰なるべしと、是に因つて神を請ひ往いて救はしめしに社稷安かりき、抑建國の神とは、天地剖判の世、草木言語の時、天降りて國家を造り立てし神なり、頃聞く所に依れば、爾の國輟てゝ祀らずと云ふ、今前過を悔め、悔て神宮を修め。神靈を祭りなば國昌へぬべし、ゆめ忘るゝ勿れと、是れは百濟に於ける神宮の所在を立證するものであります、次は任那でありますが、任那には神宮の文字は見えませんが、日本紀欽明天皇卷に、

五年正月、百濟使を遣して、任那執事と日本府執事とを召す、俱に答へて言く、神を祭るの時到る、祭了つて往かむ

と、此時は新羅切りに任那を壓迫したので、百濟王は日本天皇の『任那を建てよ』の詔勅に基き、任那國及び日本府の執事を招いて任那保全の打合せをしやうとした時であります、此國家の安危に關する重要なる會議に、祭の故を以て延引の口實とするのは、假令任那が百濟に含むところがあつたとするも、此祭は餘程國家の大祭で

【四〇】

は加羅神で任那神宮、曾富理神は忠南扶餘（百濟の舊都）の古名曾

這回朝鮮神宮の御鎭座祭に就いて、私は次のやうなことを考へて見たのでありました。

我國は神功皇后以後四百數十年間、新羅、任那、百濟の三國を支配したのであります、そして我國民の朝鮮に移住して居たものゝ數も、可成澤山であつたやうに考へられます、否內鮮兩民が、血族的に融合抱和した程度は、今日よりも遙かに優つて居たかのやうにも考へられます、何となれば、我姓氏錄に依つて見まするに、神功皇后の四大夫の一人たる、鬼將軍中臣烏賊津使主は、百濟に駐在中百濟の女を娶つて兒息を擧げ、又新羅の鎭守府將軍であつた、大矢田宿禰も角于干老の女との間に二人の子がありました、敏達天皇の六年、小黑吉士は我朝廷から差遣されて、百濟の宰となり、任那の我直轄地には夫々國守として我國臣が任命せられ、任那の宗主國たる安羅には、日本府が置かれ、日本府鄕を始め多數の官吏、戒兵が駐在し、敏達天皇の十二年我朝廷に召された、百濟の達率日羅と云ふ官吏は、宣化天皇の御代に、百濟駐在を命ぜられた、火葦北國造、刑部靫部訶利斯奚の子でありました。

此等の狀況から察して、我國人が相當に朝鮮に入込んで居たことが察しられます、勿論朝鮮の人々が我國に移住歸化した數も、之と同じ比例でありましたでせう。

そこで何人も容易に想到し得るのは、如斯多數我國人が朝鮮に移住土著したとすれば、我國人の傳統的敬神思想の上から見て、當時既に朝鮮神宮の設置が無ければならぬと思ひます、つまり朝鮮神宮は今日の我國人が、始めて朝鮮にそれを屈請したのでなくして、古の我國人も必ず今日と同樣のことをしたに相違ない、否今日よりも我朝鮮統治の期間が永かつただけ其神宮の歷史も古かつたでせう、又敬神思想の上からしても、其御祭禮は定めし盛だつたでせう、私は斯うした有り得べき理論の上から之を立證する史實の何ものかゝ古史の殘片に窺はれはしないかを討ねて見ました。

しかし此のことは最早御調べになつた先輩諸氏もあられることでせうし、私の調べは或は陳腐に屬し、或は又私の見方が誤つて居るかも知れませんが、一應私の見方を此處に發表して、先輩諸氏の御垂敎を仰き度いと思ひます。

私の見るところに依れば、上古に於ける朝鮮神宮は、新羅、任那百濟の三箇所に祭られてあつたやうに思はれます、先づ此三箇所に神宮のあつたことから申しますと

三國史記新羅本紀に

紹智王九年春二月　神宮を奈乙

とは、我國に於て天照皇大神より外にはありません、新羅、百濟共

なければなりません、決して任那國一個の土俗の祭でなかつたことが察しられます、既に新羅、百濟

京城雜筆

なければなりません、決して任那國一個の土俗の祭でなかつたことが察しられます、既に新羅、百濟共に神宮のあつたことが立證される以上、任那にも亦神宮のあつたことを想像するに、何の不都合も無いことゝ思ひます。

唯此處で問題となるのは、三國史記の前記の本文下に『奈乙は始祖初生之處也』とある事です、さすれば此神宮は新羅、朴昔金三姓の何れかの始祖の降誕地で神宮は始祖を祭つたものゝやうにも解されますが、新羅朴氏の始祖は蘿井の林間で生れ、昔氏の始祖は多婆那國で生れ、朝鮮内では生れて居ません、金氏の始祖は始林で生れ是亦奈乙ではありません、さすれば奈乙で生れた始祖は、朴昔金の何れにもないのであります、殊に『神宮』と言ふ文字からして、決して朝鮮のものではありません、これは三國史記の編者が、知らないで、斯うしたことを書き加へたのか、又は後世の人が、斯つした出歇羅目の註を入れたのが、紛れ込んだのではないかと思はれます兎に角三國史記中の不思議な記事中の一つであります。

兎に角、此『奈乙』は從來の史家は之を朝鮮語の『나을』と訓んで、『生れる』と謂ふ意味だと解し、『始祖初生之處也』は之に附會したものと察せられますが、私は此『奈乙』は『나을』でなくして、朝鮮語の『날』であつて、『日』即ち『日輪』のことだと思ひます、故に『奈乙神宮』は『日の神の社』と言ふ意味であります『日の神』それは明かに天照皇大神ではありますまいか。

百濟に至つては、明かは『建國の神』とあります、『建國の神』とは、我國に於て天照皇大神より外にはありません、新羅、百濟共に天照皇大神を祭神とする以上、任那のそれも、同一のものであつたと推定するに大なる誤りはない筈と思ひます。

以上說く所に依つて、上古に於ける朝鮮神宮は三箇所に在つて、而もそれは悉く天照皇大神を祭つたものと解することが出來ます、さすれば、朝鮮神宮は古から朝鮮に在つて、中頃内地に御歸りになり、今日内鮮の關係古に還元せられると同時に、再び朝鮮に御歸りになつたのであります、之と同時に其尊崇も、決して現朝鮮人に新らしく注入されたものでなくして遠く上古の朝鮮人の祖先が、夙くこれを内地から屈請して、『國家靜謐人民安泰』を祈つたものと言ふことが出來ます。

右に付いて、更に不思議なる記事は、古事記神代卷の一節に、素盞嗚等の御子、大年神の御子に、大國御魂神（オホクニタマノカミ）、韓神（カラカミ）、曾富理神（ソホリノカミ）、白日神（シラヒノカミ）、聖神（ヒジリノカミ）の五柱が列擧せられてあることであります、此内、韓神は加羅神で任那神宮、曾富理神は忠南扶餘（百濟の舊都）の古名曾夫利であるから、これは百濟神宮白日神は新羅神の轉訛、斯う解釋して、上古の朝鮮神宮は天照大神でなくして、出雲系の神であつたと解せられるやうでありますが、私は大體此神達の神名からして、それは比較的新らしい名前で、古事記に於ける他の神名と大いに趣を異にし、これは後世古事記編纂當時の史家の誤筆か又は語部の誤傳ではないかとの疑を懷くものであります、さすれば大國御魂神は矢張り、天照皇大神の荒魂で、聖神は我天皇を指し、此五柱は内地及び朝鮮を總括分擔せられるもので、出雲系の歷史にこれが混入されたのは、無意識の混入誤傳か、又は更に寓意ある上古の秘史を傳へるものではないかとも考へるのであります、何しろ本件に就ては大いに研究の餘地あることゝ思はれますが、餘り長くなると御さまたげですから、これ位にして筆を止めて置きます。（一四、一一、一八）

◈平壤見聞記

石川利夫

◎平壤の廟南松井民次郎君といふと、平壤だけの所謂名士でなく朝鮮的に名物男で通つてゐる男である。

◎どこか矢才肌のところがあつて、目のつけどころが、一風變つてゐる、進んで居る。

◎そのくせ、金儲けは、あまり上手でないから、不思議なものだ

◎近年老境にはいつて、頓に百姓仕事に興味をもち、毎日〳〵土いぢりして居るとのことである。夫妻そろツて長唄が道樂。晩酌陶然のあとは、『お前彈け、おれが唄ふ』……だから間違はない。そしてその藝術は、むろん素人の品彙四儔ではないのだ。

◎先生、何をやらせてもうまい文章、筆蹟、御挨拶——まあ朝鮮での逸材。

◎風の噂に聞くと、この頃會頭とやらの競爭を、内田錄雄君とやるとか、やらぬとか。——つまらないな。廟南先生は、やはり百姓と、長唄に隱れてこそ、その人の晩年らしいのに。

【 ㊗ 】

野球の興行化

林原憲貞

大洪水後の京城の秋は例年に見ない好天氣續きであつた。

秋晴れの日和は運動に相應しい絶好の季節である、紺碧の空に球の唸る響を聞いては、一知半解の猫も杓子も商賣そつち除けにグラウンドへと出掛ける、正に現代民衆の憧憬の的は近代流行の野球競技である。

曰く立教大學、曰く奉天軍、曰く全鮮爭覇戰、曰くシカゴ大學と寧塚、曰く米國女子野球團と、送迎に遑ない程の殷賑さであつた。高い觀覽料と、交通稅的重複的な入場料とは、一部非難の的となつたものの、現代社會思想的表象としての野球熱を緩和するに何等の効果を見なかつた程の盛況であつた。

多忙なりし京城の秋は暮れ逝き、野球の話も消え失せ、大地凍る冬籠りに向ひつつある。

◇

體育運動の普及、奬勵、發展——人としての所有能率を增進し、延て國家富强の基調を爲す意味に於て、寔に結構で何人も異論のあるべき筋合のものでない。

興味と勝敗との結合に依り、不知不識肉體的動作を惹き起さしめて、體育の目的を達成せしむるものが今日の運動である、就中野球は、ルール複雜にして競技の變化多く、觀者としての興味は津々として盡くる所を知らない味ひがある、到底他の庭球陸上競技等の及ぶ所ではない勝負の趣味がデリケートで、相撲やランニングの樣に簡單でない性狀が、今日の如き盛況を來した所以であらう、從て運動本位より觀覽本位に轉化した所以でもある、觀覽本位は勝負と選手の强弱に重きを致す樣に推移したものと思はれる。

現代民衆の享樂的感興は、何と言つても活動寫眞と野球とである、之が現代世相の縮圖とも云へやう、日々の新聞に這の世相の記事を見ぬ日はない。

◇

享樂的觀興としての野球が、興行化（職業化）するは自然の勢である、朝鮮では『內地の有數のチームを招聘すれば、相當の旅費が要るから已むを得ず觀覽料を徵する』と言はれて、開放性の富んだ運動は斯かる理由で鎖されて居る、戸塚運動場で試合された早慶野球戰は、寸毫の旅費を要せぬが入場料徵收の理由は『入場者多數であるから之が取締りの意味即ち人員整理の爲』と言ふであらう、兎に角人員整理、所要經費充當の美名の下に隱れて居る立派な興行である、宜なる哉近頃政府や東京市當局では、大學チーム野球に興行稅を課せんとする說があるさうだ、どうです、斯うなれば名實とも顯然として確實に興行視せねばならぬではないか。

無產政黨の首領に擬せられて居る早大教授安部磯雄氏が、本夏京城に來られたときの話に。

『早稻田のグラウンドのスタンド擴張工事に、五萬圓某銀行より借入れて工事を遣るが、早慶戰の入場料で全部返濟する積りである』とさも得意氣に語つた。

シカゴ對早大戰の入場料が、初日に限りリーグ戰以上に一等三圓、二等二圓、三等一圓とし二日目より引下た、世間よりは露骨な營利政策と言はれて居る

◇

スポーツとしての野球——殊に學生チームとしての野球、既に其の本質上入場料を徵すべき筋合のものでないことは勿論である、米國はどうの斯うのと言ふ人もある樣であるが、抑々米國が運動職業化の權化地である斯樣な例でスポーツ本來の使命と眞髓とを沒却することは、如何にも畏れ多い不合理極まることである、事情の許す限り、入

場料の撤廢減額を期し、興行化的惡傾向より這の尊いスポーツを救ふべきである、特に純なる學府の競技試合を興行化せんとする傾向は、運動の權威を毀損し、延て教育の神聖を汚す虞あることを憂へざるを得ない。

野球の覇者である早稻田學園の學生等は、優勝の誇りを外に不平を零して『學生に野球をさして學生から觀覽料とをる……何と言ふことだ、自校のチームが吾等の代表として試合を爲すときにも、同じい高い料金を支拂はねばならぬとは矛盾も甚しい、吾々は體育費を學校に納めて居る、其の金は何に使用したか報告すらない、體育費を徵收して置きながら何等の報ぬがなく、自校チームの試合すら割引の恩典もない、野球の職業化も甚しいではないか』と言つて居る。

◇

運動は普遍的でなければならぬ、老幼男女の差別、技倆の優劣を問ふべきではない、栃木山が五人や十人日本に居たとて日本の富强に役立たぬ。

運動其のものに從事する者は學校で言ふならば多數の生徒の集團の中僅かなる一部少數者に限られて居る、數萬の觀衆を集めての競技も、運動する者——選手と稱する九人の少數者である、試合外の平素の競技者とても、一流二流の選手等で大した數でない、選手だけを强くする目的の運動行爲は觀る爲の運動と言はねばならぬ、九人の選手を强くし之を愛する以上に、他の不運動者——運動意志を有しながら其の機會を得ざる者と、運動嫌忌者とを拉して運動に惠ましむることが、運動の本領觀念に鑑み至當の策と思惟する。

尤も觀る者としても觀ることに因りて生ずる間接的副好果——强いて言へば剛健的思想の刺激と、日光浴と、尙享樂的快感趣味の享受等の賜もないではない、併し運動使命の順逆轉倒であらねばならぬ。

とは言ふものの、野球の職業的興業的流行は磅礴として進展する、滔々として彌蔓する、這の時代的傾向は、到底抑制防止すべくもない、高價より課稅に介意なく、『面白い』、『見たい』てふ享樂的心理は、主催者の興行化を助長せしむるに恰好である。

キネマの世界は容易に廢れぬ興行的野球の將來は、如何に成り行くか、善化か、惡化か惰性の增長か、革命か……吾等も亦野球に興味を持つフワンであるが、寧ろ興行化の未來的趨勢に一層の興味を持つものである。

（十四年十一月二十日稿）

◈お邸拜見記

川尻非空

◎中島司さんのお住居は、南山本願寺の裏門のところに當る。邸内に木が多く、落葉が庭のあちこちに散らかつてゐる容子。どうしても何々宗匠の山莊？、草庵？といつたかたち。銀行屋のお宅ぢやあないな。

◎伊藤憲郎さん、竹添町二丁目の丘の中腹にお住居かある、丁度森の中の草庵といつた容子。青葉若葉のころお訪ねすると、軒先から青い脂でも、べつとりと滴りさう。これも心の花あたりの歌人のお住居といつて了ひたい。

◎德野眞士さん、壽町四三に居られる。小ぢんまりしたしづかなお住居。何んだか女文字の表札が出、搆子から透して見ると、大きい姿見でもほの見へさう。萬事意氣好みと御承知あれ。

◎廣江澤次郎氏、大和町三丁目の、山寄りの堂々たる大邸宅。お訪ねすると、とても立派な天然とり入れの廣い庭がある。ツイ、大に奢つてもらはねば、このブルの屋敷を退散するものかといふ反抗精神が起る。

◎守屋德夫さん、まことに平凡な舍宅のお住居だが、二階に導かれて、主人一流の京城つれ〳〵草を聽いてゐるとどこか富裕な大俳人の家にでも招待されてゐるやうな氣がする。

青蛙

土居寛申

香に醉ひ泰平を謳歌しつゝ往來織るが如き有樣であるが、貴樣を顧るものが一人としてあらうか此紳士の芳情を忘れてはならぬ」と査公は忠實な職務振りを示した後に私の住所氏名を問くのであつた、私は僅かのことで氏名を明かにすることを好まなかつた、勿論査公も諒察して追究しなかつた、査公に一禮し黑山の樣な彌次の中を掻き分けて交番を去つた、どうしても醉が激しく電車に乘れぬので彼と上野驛まで徒歩することとした處か途中彼の擧動が矢張何となく私の腑に落ちぬ、疑へばおかしい點がある、さればとて今更見捨てる譯にも行かず行く處まで行く外はない、儘よ上野驛で切符と辨當とを與へて見やう喜色があるか離色があるか後の考は其上のことにせうと淺草橋を渡り厩橋の交番前まで來た時、上野の鐘は十時を報じた、其處で私は疑ふた、此から上野まで尙二十分を要する、そんな時まで浦和行の列車があるかどうか不安になつた、交番の査公に聞いて見たが分らぬ、時に彼は品川からなら十一時まであるが上野からは八時迄だといふ、酒で神經の鈍つて居つた私は何の疑もなく其を信用した、それでは迚も品川まで同伴は出來ぬ、玆に金三圓あるから此れで品川から乘るがよい將來立派な男になれと厩橋の停留場から滑行を促した、丁度通りかゝつた電車に飛び乘つた彼の態度には何の感謝の風もない、禮儀も知らぬ奴と考へながら其のまゝ私は徒歩歸宿したが尙疑念去らず早速旅行案内を一見すると終列車の時間は彼の言と正反對、未來の法律家はマンマ古手の狂言に……。

よく泳ぎよく溺れけり青蛙

京城雜筆

私は兩國の欄干にもたれて醉顏を夜の河風になぶらせて居つた。……其は私が赤門在學時代の或元旦親籍の内であまり飲み過ぎて電車にも乘る氣になれず京橋八丁堀から本鄕菊坂まで醉歩を踏みしめて歸る途中のことであつた。……川面を渡つて來る冷たい空氣を腹一杯吸ひ込んで吐き出す氣持は何ともいへぬ、何處からともなく流れて來る意氣な三弦の音を聞きながら、波にゆらぐ燈火の影の碎け行く先を、うつとりと眺めて居る心地は丸で夢のやう、墨江新春の夜景は中々捨て難い趣がある、何處を見るともなく頭を廻らして居つた折、程近き岸邊黑影が彷徨すること須臾、遂には水に投ぜんとする姿勢をとつた、私はハッと夢から醒めた樣な氣がしたが、次の瞬間には其の黑影に飛びついて腕力まかせに道の眞中まで引きずつて居つた、講談でよく聞く十八九の目の覺めるやうな美人の氣持でソッと引き起して街燈の光ですかして見た、處が十八九には相違ないが如何にも見すぼらしい姿の青年であつたのには輕い失望を禁じ得なかつた、兎に角型の如く訊問が始まる、彼は浦和の產で數年前横濱の一商店に奉公したが辛抱が出來ず今曉無一文のまゝ飛び出し徒歩鄕里に向ひ辛うじて帝都には入つたものの、寒さは寒し食物は攝らず疲勞其極に達し饑餓身に迫るけれども都門に一人の知人もなく又考へて見れば鄕里の家も彼の出關後零落離散して果して身を容るゝことが出來るかどうか分らぬ彼是考へれば死ぬ外途がないからとのこと、私は聊か可愛相になつて來た、場合に依つては浦和迄位なら旅費や辨當代は助けてやつてもいゝと考へた、然し昔からよくある手だ、うつかり乘つて詐欺にかゝつては苟も法律を學ぶ者の不覺此上もない、此は念の爲め本職の査公を煩してと考へついて橋畔の交番に連れ込んだ、査公はさすがに拔目なく尋問して居つたが更に怪しい點がない、其處で彼を私に引き渡して吳れた、其時査公は彼に說諭した『本職は貴樣を雇主に送還するのを正當と思ふが、此紳士……私は當日制服を脫して和服の禮裝に中折帽トンビといふ一見立派な紳士風であつた……の好意を無にするに忍びず一應貴樣の希望に任せる、然し貴樣はよく考へねばならぬ、今宵正に新春第一日の夕都下幾萬の士女は屠蘇の

◈わが村の歌

市山盛雄

ちるべき葉皆ちりつくし家々がはなればなれに見ゆる我村

元日氣焰

廣江澤次郎

老人の元氣

何かお祝ひ事があると母が好んで茶の間の床に懸ける田能村直入さんの軸がある。直入翁餘程上機嫌の時に筆を揮はれたものらしく一疋の櫻鯛が畫いてあるが生氣潑溌として眞に迫つて居る。到底八十九歳の作とは思はれぬ筆力だ。而して直入翁自ら賛をしてゴ坐る

御目出度事もしたひぞ櫻鯛
土產にしたひ是非もらひ多袋

八十九翁直入道人畫賛

箱書きは九十一歳の時であるが墨痕鮮かなものだ、私は常に思ふ英雄豪傑名人巨匠は大抵元氣旺盛精力絶倫にして老來益々鑠鑠!、私共若い者到底鯱鉾立しても及ばぬ。實業界でも昨年支那各地の顯官紳商連より師父の禮を以て歡待され蒙古入までして萬丈の氣を吐きたる大倉鶴彦翁は九十歳!、澁澤青淵先生も八十七の高齡!、馬越ビール王の如き八十五歳の老翁なるにも拘らず、昨年五十も年下である三十臺の美人と正式に結婚し、人も羨む程琴瑟相和して居ると云ふ若返り振り!、精々若い處で淺野セメント王の七十七歳だが年中東奔西走、南船北馬の活動力には敬服だ、私は東京よりの歸るさ、此淺野翁と汽車中偶然乘合した山紫水明繪の如きアノ琵琶湖畔を馳つて居たがセメント翁は同乘の三菱の社員連とアノ重厚な口調で談論風發、而かも其算數に明敏にして日本と世界各國間の運賃を暗記し、直に商品の原價を胸算用にて割出しサッサと商談を進める等全く以て驚く許りだ。此セメント翁豪嘯して曰く、

『人間も六十迄の間にやる事は兎角危つかしくて困る!、マアマアマア六十歳超してからの仕事が始めて安全圏へ這入たと云ふ者さ!』

馬越ビール王も述懷して曰く、

『私も五十迄は借金で首が廻らず閉口したが五十から漸やく儲け出しマアマアマア多少財産も出來た』

道が何れも千軍萬馬生き殘りの豪の者丈けに偉い者だ。私共の好刺戟劑であり活模範だ、謹んで敬意を表する者オンリイ四十二歳の私一人であるまい。

青年の奮闘

明治四十年頃、亞米利加の奉天總領事に白面の一青年があつた、彼は當時二十七歳の若輩であつたが滿鐵中立案、錦愛鐵道の敷設權及法庫門鐵道問題にて縱横無盡に辣腕を揮ひて雷名を天下に馳せ、日本の朝野をも震駭さした。彼の名はストレートと云ひ、後年紐育に歸り金滿家のお孃さんに惚れられ結婚したと云ふ果報な男であつた。勞農ロシヤでも青年が隨分奮闘して居る、最近東方露領から支那各地を巨細に視察して東京に歸つた代議士中野正剛さんもロシアの委員連を評し日本の維新當時の豪傑連ソックリだと頻に其奮闘振りに感心して居られた。總じて西洋人は純なる青年が大馬力で活動し又社會も成るべく純眞の青年に思ひ切つて活動させる樣に思はれる。日本の維新當時を回顧すれば皆若い人が大仕事をした。特に私は明治時代に迄維新の元勳として花咲かせし諸豪の大政奉還當時の年配を拜見に及ぶ。

西郷南洲先生	四十歳
大久保利通先生	三十八歳
木戸孝允先生	三十四歳
板垣退助先生	三十一歳
大隈重信先生	三十歳
伊藤博文先生	二十八歳

青年も大いに働くべし、老人亦益々奮闘すべしだ。所謂國家總動員の今日だ、不況とか艱難とか云ふ奴は一蹴し去らねばならぬが、此野郎仲々執拗な奴で折々手古摺らせるワイ!、併しワシントンも謂ふた『艱難を一の事業と思へ』と大悟し徹底すれば所謂苦中有樂!、苦即樂?。

六十花盛り

醉仙老として漢城の天地に俠名を馳する大垣金陵翁が醉中愛吟する歌に曰く、

今の世は四十五十はお若い内よ
六十七十が花盛り百と二十五も
何のその心の持ようで若くなる

此意氣でワッショッショと大いにやるべしだ、國運の進暢、民族の發展、文化の促進何のそのじや。謹んでお正月の祝酒を一杯餘計に頂戴仕る矣。

京城七不思議

大山一夫

一地方で不思議視せらるゝ七種のものが、所謂其の地の七不思議である、古來我國に七不思議として、人口に膾炙して居るものが澤山ある、即ち越後の七種不思議、濃州の七不思議、信川諏訪の七不思議等がこれである。其中で、越後の七不思議か一番名高いやうである、其他に親鸞上人の七不思議といふものもあるとのこと、又廣く世界の七不思議など稱するものもある。

以上數種の七不思議を一々點檢するに、昔に於てこそ不思議であつたかも知れないが、文化の進展せる今日では、科學の力により又常識により容易く說明がついて、敢て不思議とするには足らない。之れを要するに、學問が鍵となつて、不思議の扉を開き、其の正體を見屆けた譯で、我々子供の時分ヤー不思議だ、難有いと思つて、驚異の眼を張つた神秘的のことも大人となつてから考へて見れば、馬鹿〳〵しく思はれるのと同じ理由である。

我京城は今や半島の中樞で、小東京の觀を呈して居る、學者先生先覺者達も多勢居られるし、又近く花の咲く頃には多年の希望であつた最高學府が出現する筈になつて居る。然るに玆に『京城七不思議』を提唱するのは、時代錯誤か痴人の夢物語りか、將又寐言か、何にしても正氣の沙汰でない、鐵面皮、非常識、氣違ひやとの誹は免れまい『そう言ふこ自身が七不思議の一つだ』などと彌次られるかも知れない、しかしそれは覺悟の前である。

豫備的の前口上がちと長過ぎた急いで本論に入りませよう。

（一）清溪川の不潔さ

京城内を東西に貫流する川がある、名づけて清溪川と稱する。地圖で見たり、一寸名を聞いた丈では、廣島の大田川、岡山の旭川、京都の鴨川、東京の隅田川、遠く札幌の創成川など都會地を貫流する河川を聯想させられる。一見喫驚仰天である、雨期後には野菜が川中島らしい洲に作られて居る、意外な利用である、惡口のやうだが率直に評ぜは天下第一の不潔なる川、否川でない、下水溝である清溪川の『清』の字が泣いて居る大正三年春、府制が布かれる前までは名無し川であつた、こんな奇麗な氣のきいた名を何誰が命名なさつたか、惡戲か、それとも洒落か、不似合も甚しい、此川を美化する積りでつけたのなら早く何とか淨化して欲しいものである、先づこれが不思議の先頭である。

（二）廣い漢江通二丁目なし

府内で京釜線以東岡崎町三坂通以南、所謂新龍山一帶地は、漢江通といふ一つの地名になつて居る其面積たるや甚だ廣大である、優に京城府の五分一乃至は六分の一位を占領して居ると思はれる、京城は町、洞、通、丁目合計一八六に區劃され、隨分小さい町、洞等があるに對して、此處丈は漢江通一天張で押通されて、丁目の分割がない、練兵町とか三角地とかは所謂俗稱で正式の地名ではない、私自身は必要に迫られて大正三年頃、漢江通の番地の位置等を詳細に調査したことがあり、今尙記憶に存して居るから、一寸とも不便を感ぜんが、新來の方は隨分困られることゝ想像する。一體何の必要あつてあの廣大なる地域を一つの名稱にしたものか、其地方の希望か、それとも他に理由か存するか、是不思議の第二である。

（三）黃金町と糞尿車

黃金町は京城での東西に貫通する三大通路の一つで、京電が快走して居る、名稱も美しい、此處に住めば貧乏神も退却する樣な氣持がする。然るに京城廿萬の人糞は此通を大腸小腸視して通過し、光化門といふ肛門から排泄せられて居るのである。電車から下りた時人道を辿る時、町を横ぎる時など臭氣に襲はれ、不知不識はんけちで鼻を蔽はざるを得ぬことに度々遭遇する。人糞のことを粹人文士が黃金とか山吹とか美しく讀んだのを見たことはあるが、黃金町と糞尿車の横行、何だか名と實とが不調知で不思議に感ぜられる、是不思の第三に數ふる所以である。

（四）鐵道官舍に二階建なし

漢江通の十五、十六番地に鐵道官舍が數百戸幣列して居る、處か

京城雜筆

どれもこれも皆平家建である、宛然二階禁制札が立つて居る樣である、常識上から考へても出水癖のある、漢江江畔なるの故を以て、二階建以上が望ましいのに平家建許りとは何たる不思議か、どうも不可解である。本年の大水害で氣がついた譯では無論ない。地震の少い都會地の建築物は垂直的に發達すべきものなりとは人文地理の教示する所である。

（五）北大門を缺く

南大門、東大門は現存し、西大門も大正四年迄はあつた。小學校で其名を襲ふて校名として居るものが三校あるし、其名は隨分世間に弘まつて居る事は隱れなき事實である。四方の一である北に大門のなきは不思議といへば不思議である。尤も京城の西北や北に北門や肅清門のあることは知つて居る北大門がないから京城が不潔（きたない）のだとほ、悪い洒落だ。

（六）鍾路の鐘の沈默

善信閣の鐘は京城名物の一つで高さ一丈、周圍一丈半、半島巨鐘一にして元は圓覺寺内にあつたのだが後今の所に移され、現に共同便所と隣保團結をし、沈默を續けて居る、どうも私には不思議で堪らん、一體あの鐘は鳴らないのか將又鳴らさないのか、鳴らざる鐘は無用の長物で無價値である『鐘大なるが故に尊からず、能く鳴るを以て尊しとす』鐘の生命は其音調にある、殷々たる鐘聲は東洋の情調である。善信閣の鐘聲を耳にしたい、そして日常吾人は反省をしたいのである。

近來不景氣の挽回策なるものを多くの誌上で拜見するが、私の挽回策は下の通である。曰く時の確守善用である、京城人が時を確守善用さへすれば、京城の不景氣は逃げると確信して居る一人である此筆法で推せば日本人總立になつて時を確守し、尙善用せば、日本は好景氣になる譯である。由來京城人の時間觀念は極めて薄弱である、例せば議會合の如き軍隊、驛郵便局などを除きては豫告された時刻に開始されたのは極めて寥々たる狀態である、甚しきに至りては豫定より一時間以上後れることがある、しかし司會者は平氣である、言譯を聽けば主なる來賓の顏が見えないからと。心配はいらない、時刻が來たらドン〳〵始めるのぢや、勵行するのぢや、そうすれば遲刻者は恥を知つて來る。時の尊重に反對する馬鹿は一人もない、唯麻痺して居るのである。歷史ある善信閣の巨鐘を晝夜大に撞いて、府民の惰眠を覺醒せしむる先驅者たらしめたいものである。

（七）初等學校の運動場の狹隘なるもの多き事

府内公立初等學校は内鮮を通して二十七校あるが、相當の運動場を有して居るのは約三分の二で、あとの三分の一は猫額大で全兒童が一時に出た時は宛然芋を洗ふの狀態である、甚しきに至つては校舍敷地と運動場とが、交通頻繁な道路で切斷されてる憫然なるものもある。運動場は兒童のパラダイスであり、天國であり、極樂であり、淨土である。運動場の良否、廣狹が將來の市民體力に影響する所頗る多大なるは何人も否むことが出來ない、然るに狹隘は現實である。體育尊重の今日大なる矛盾であり、又大なる不思議である。

以上は心に浮んだことを順序もなく羅列したのみである、尙不可思議と覺ぼしきことも多々あるが豫定の七に達したから普信閣の鐘に同情して沈默する。

よろこび

赤木萬次郎

十二月七日あさ皇孫殿下御降誕奉祝式にかしこみて

すめみまのあれますみよをことほきて朝日てりはえとよさかのぼる

河水清

たつ日あびいよむすばなむもろともにみもすそ川の清きなかれを

◈病中自適錄

芥川正

◎永樂町人足下、余は十一月末より又々腸患に罹つて釜山府立病院病室内の人となり肉益々落ち骨愈々出で、羅尾君の謂ゆる寒巖枯木の風致を添え來るを自覺した。

◎由來小生の腸患は慢性であつて迚も旬日の内に治すべきでない醫士は本年の寒中丈け病院で療養せよなど云ふが小生は全治間を長くして本年中だと自期して居る。本年と云つても今から二旬餘で隨分の長時間である。

◎只幸ひにも病氣の花たる熱が少しもない、讀書はドレ丈やつても宜しいと醫士が云ふ、師走の眞最中、各方面、各階級晝夜兼行の多忙中、余は獨り病院の閑房に病臥して古人を親しみ今人と接して悠々自適の人となる、と思へば病氣も亦一種人心の保養劑なる哉である。呵々

千萬人と雖も我れ行かむ

中島司

大正十五年を迎ふ。馬齒重ね來つて四十又二、過ぎ來し方を顧みるに、我が辿りたるは如何にも平々凡々の行路であつた。深山もなければ幽谷もなく、大河もなければ曠野もなき、至極單調な環境を何等他奇なく歩いて來たに過ぎなかつた、併したとひそれが單調で無味だつたにせよ、私は今日までの道程に未だ曾て倦怠も疲勞も覺えたことはなかつた。人生の行路に旅愁を感じたることはなかつた路傍に踞んで脚をさすつたり欠伸をしたことはなかつた。

如何に自家の行進路が平凡單調であらうとも、それが自から選んだ道であり、又自から如何ともすることのできない運命の手に導びかれたる道である以上は、是れ即ち自已に應はしい道として、歩一歩元氣よく愉快に、その行路を樂しみ進むより外に致し方はあるまい。時に岐路に立ちて、思案させられることもある。併し大路、小路、夷路、險路、將た又直路迂路その何れを歩むにせよ、人間一代の行き著く所は一ありて二なく、早かれ晩かれ同じ所へ辿り著くのだから、險難の前に慨ち、岐路に面して迷ふは迂愚だ。疲れたら平路を悠くり歩んで可なり、勇氣あらば好んで險路を踏破する、亦人生の壯快事ではないか。

× × ×

先達て阿部無佛翁を招待して京城の舊友が翁のため回春祝の宴を催ほした節、口が達者で筆まめなさうして皮肉屋の澤次郎廣江君から、小生宛らいお叱言を頂戴した平生に似氣もなく――否平生も或は然らむ――立て續けに獻酬の盃を擧げつゝ、所謂紅焔萬丈の慨を以て一座の猛者達を凹まして居た廣大人は、何思つたか小生の前に御興をおろし、『オイ、コラ中島貴樣一體怪しからんぞ、銀行の飯を食つてから、このやつすつかり臆病ものになつて、さつぱりあかん、オイもつと大膽になれ、いゝか』其の聲たるや昌慶苑の虎の咆ゆるが如く、小生の膽爲めにヒヤリ、思はずぎよつとしたことであつた。

『臆病者』とは廣大人よく言つた。成る程至言だ。意味深長だ。昔の我れから見ると、今の我れは因循姑息、臆病と見えるであらう十年一日の如く勇往邁進、飽くまでも慓悍で押し通してる廣大人の眼には、もどかしく見えるであらう。自らは臆病とも思はず、因循とも思はず大いに天下の茶目たるべく元氣を存養しつゝある此の我れも、他より見てはさうでないのか。今更そんな風に見られるやうじや、先きが心細い。よし來年は寅年ではあるし、一つ精々元氣なところを廣江君に見せつけてやらう。なあに、銀行の飯を食んで居ても臆病になんてなるものか。と言つて廣江君の一言に毛頭憤慨したのではない。廣江君はあの時無佛翁を朝鮮の貴重品と禮讃し、序に小生までも準貴重品扱ひにしてくれた同君の心事に徴しても、あの一言は、もつと深く味はうべきだと思つた。

× × ×

大正十五年は寅だ。此の寅があばれ狂るか、それともおとなしく去つてしまうか、それは今判らないが、何だか日本も多事なやうな豫感がせられる。何れにせよ、我等は自らを強く持するが肝要だ。用意と覺悟を怠つてはなるまい、緊褌一番勇を鼓し寅年に處して行くべきだ。天下と與に春風に座するの時は何の日か、それも判らぬが、吾人にして千萬人と雖も我れ行かむの心意氣があらば、日々是れ好日、晴好雨奇だ。（十四年十二月七日夜南山麓自樂艸舍にて）

◈憎めない男

平田久雄

今洋行中の遞信局の吉村海事課長は、頗る飄逸な男▲宮木又七知事の下に、全南で財務部長を務めてゐた頃、京城から歸任して曰く『知事さん、どうも困りましたね』『何が困つたのだ』『何處へ行つてもアナタの評判の、香ばしくないのに。あゝ困つた〳〵アハハハ』又七さん苦い顏したが、それでゐて憎むことの出來ないのが、この吉村さんの特徴であるさうな。

柿右衛門の事

中村櫨園

私は先日大母の紙上に、中村仁左が柿右衛門劇を中座で上演した際、其の劇の主人公たる柿右衛門の裔澁碓君が態々有田から仁左を訪ねて觀劇したと云ふ樣な記事を見ました。其の時に私の頭に初代柿右衛門の事を泌み〳〵と思ひ浮べました。

私は今から丁度十八年前まで佐賀縣の商工課に勤めてゐました。其の際の擔當事務は佐賀縣の陶滋器の係でありましたので、傍ら官命やら自分の好みやらで、其の沿革を調査する事に沒頭した時代があります。其の爲めに柿右衛門の家に就て初代の作品なども折々鑑定甄別の資に供した事もあります。

柿右衛門は有田燒に錦手の燒方を發見した第一人者であり、錦手の元祖であることは私が玆に呶々と申すにあたりません。今日の國定教科書には其の傳記の一節を劇的にさへ書いてあります。柿右衛門は有田燒（俗に云ふ伊萬燒）に錦手の法を發見した一人者と云ふばかりではありません。我が大日本帝國の陶滋器に錦手の燒方を創始した日本に於ける第一人者であります。

世間によく伊萬里燒と申しますが、伊萬里は古來陶滋器の製產地ではありまはん、輸出地であります。伊萬里燒と俗に稱する陶滋器は有田を中心とする一地方、特に有田鄕から生產するものを、伊萬里に搬出し、伊萬里商人の手に依りて他方に賣捌かれたのでありますから、一般に伊萬里と通稱したのであります。

其の有田は鍋島藩時代は有田代官を置いて取締り、秘密生產地として隨分に、嚴重な監視を加へて、絕對に有田燒（通稱伊萬里燒）の製法の漏洩を取締つたものであります。有田の四周には關所を設けて、行人を取締ると共に、濫に製品の搬出をも禁じたのでありますが今で云へば發明權の擁護と、製品の調節とを保つて、永遠に其の利益を獨占しようと云ふ趣旨に外なりません。

有田燒の製法が、九谷燒に盜用せられた事實などは、其の裏面に大聖寺藩士の某（旅行中にて記錄の參照出來ず）と有田の製造家の娘との間に、一場の悲劇が演せられた樣な事實があります。其の他此の初代柿右衛門は發明家によくある、人生のあらゆる忍苦に鬪ひ勝つて、發明を完成した錦手燒の元祖でありますが、其の製品は氣品尙高、工案優逸、到底筆紙で描寫する事は出來ません、特に柿の作品に妙を得て、其の眞を極めた爲めに、柿右衛門なる名稱は、時の藩主から頂戴したと云ひます

柿右衛門の作品には、製品の糸底に、角の內に福を書いたのを表はしてゐます。代々之を承繼して今はタシカ登錄商標となつてゐると記憶します。

初代の入神の技は、悲しい哉子孫の爲めに承繼せられなかつた。現代澁碓君の技も定めて其の通りであらう。家業次第に衰へて、私が佐賀縣に居た十八九年前は、滋器の業は僅かに命脈を保つに過ぎない狀態でありました、殊に罪なのは狡猾な商人の爲めに、初代二代頃の作品を模造して、之を古物商や骨董商に賣つて、世の自稱骨董家につかませて懷を絞り取る具に供せられてゐた樣な、なさけない狀態でありました。之も身すぎ世すぎの爲めと思へば、仕方ないと云へば仕方ない事ながら、隨分罪の深い話であります。他日錦手の事に就ては、折があらば書いて見ようと思ひます。

（一四、一二、七、みや島を汽車の窓から眺めて筆をおく）

◈花の下ゆく

吉田莊一

中村櫨園氏、久振りに筆をとる、その櫨園氏の用箋に『拙詠』と題して『水仙の匂ふまがきを廻りおへて花の下ゆく水とならばや』

【四九】

閑題目

永樂町人

正月

正月は、一つの亜片劑である。御慶御慶で、萬人を陶醉せしめる所に、その効用がある。

正月の効用

神代ながらの春は來にけりといふ言葉がある。

神代の夫婦關係、男女關係、變愛關係――否一切の人事關係を觀ると、それは立派な喜劇だ。否天人嬉戯の圖式だ。

そして正月は、我々をして、少くもそれに接近し、追隨せしめる。

この時、人間の世、神の世に近しとでもいはうか。

正月の効用は、即ちこゝにあるのだ。

又

恐ろしい人間の社會である。人々は、明けても、暮れても搾取的意圖と、巾著切的機敏で相對する。

實に慘憺たる、而して荒寥たる社會が、この人間の共同宿泊所である。

正月は、幾分にても、この羅刹の如き人間を、地獄の如き社會を、陶然として天國に接近せしめる。

人間に、神の心を味はしめる。

正月の効用も、決して皆無とはいへぬと思ふ。

人間發生史

元日や神代のことも思はるゝといふ言葉がある。

正月に於て、人間發生史、人間發達史を思ふは、むしろ人情の自然だらう。

人間の發生が、二十五萬年前の昔だとすれば、彼等は少くも四回の氷原時代に遭遇したであらう。

その頃まで人類は、赤裸々で暮して居たとすれば、彼等のこの天難に對する苦闘は、いかばかりであつたらう。

私は、荒天に、爛々たる恒星群を觀、亦多夜依稀たる風雪に對する時、原人の痛苦の、いかにひどかつたかを思ふ。

生殖の力

しかも、人類が、よくこれに耐へ、よく今日の昌榮を來したのは何であるか。

私は、それを人間のうみの力、増殖力、即ち性能の豐富さに歸したいと思ふ。

そして正月に、人間の發生史發達史を讃仰するなら、更に賢明に、人間の性力を、謳歌して然るべしと思ふ。

又

人間は、何を恃んで、生きるのだ。

功名が何だ、富が何だ。藝術が何だ。

箇々人の命が、七十年を出でないやうに、彼等の所有は、決して永劫を期することは出來ない。

しかし、若し聊かでも、恃み得るものがありとすれば、それはこの社會が、尚つゞくことである。我々に後來の子孫と、人間と、世の中とのある事だらう。

我等の墳墓は、のちの社會が保全してくれる。

そして、後續の社會とは何だ。それは我々の生殖の力から出るものではないか。

素直に觀察して、我々は、我々の生殖の力を、禮讃せずに居られないではないか。

途遠し

我々は、今大きいものに、突當つて居る。

それは、空間、宇宙の廣大さだ。

我々は亦、細微なものに、行當つて居る。

それは、原子、電子――更にその下の潜在物質だ。

望遠鏡か、壯大なればなるほど、空間は無限に擴張され、顯微鏡か、精緻なればなるほど、極微物質は、益々么微を極める。

學問は、恰も涯なき曠野を行くやうに、日暮れ途益々遠しの觀がある。

？？？

外なる生命、それも？だ。
内なる生命、それも？だ。
人間は、慧智を抱いて、將にその慧智に泣かんとする。

共同宿泊所

人間の力が、的確に加へ得られ、その効果を、現實に期し得るのは、先づこの我々の社會から

しかも、この我々の社會さへ今や矛盾と、汚濁に充ちて居る

望遠鏡と、顯微鏡とは、しばらく學者に一任するとしても、せめて我々は、この人間の共同宿泊所でも、今少しく整頓したらどうかと思ふ。

これ本誌の目標とし、努力の焦點とする處である。

◎正月號は、十二月十一日締切つた。勿忙の際、十分の充實を期するを得なかつたのは、讀者に向つて、深くお詫する次第である。

◎尚また、二月號は正月を中にして、寄稿の蒐集容易でないと思ふ。各位の御助力を、特に懇請して置く。

◎前號――十二月號松原さんの句『枯れ草山のふところの寺も暮れゆく』とあるを、との一字を脱字した。大評判の句だけに、汗顔の至りにたへぬ。茲に特に正誤訂正して置く。

編輯後記

編輯同人

◎茲に大正十五年の元旦を迎ふるに當りて、本誌後援者各位の御健康を、衷心から萬福する

◎本誌もこれで、創刊第三週年を迎へる。經營的方面は、決して樂ではない。けれど、氣息奄々といつたやうな、病的狀態ではないから、どうか御安心を願ひたい。

◎誌面としては、京城知識階級の、純然たる公的機關となり本誌を手にせざれば、その階級の動靜は、わからぬとまでいはれる、同人はこれを以て、精神的一大成功だと認めて居る。

◎書かないことが日本人の習性、ずぼらが我國人の悪風である。これを打破せんとして苦鬪すること、滿二年間、京城のみで、三百餘名の共鳴者、寄稿家を得たことは、本誌の大に得意とする處である。

◎今後、書かざる知識階級は京城に一人もこれなきこと――

謹賀新年

大正十五年元旦

京城雜筆社

松本武正

謹賀新年

大正十五年一月元旦

京城雜筆社

社員一同

細工の御用は本町
德力へ
電本三九三九

金銀白金

京城 德

地金ノ御用ハ
京城明治町
德力本店出張所
電本二〇八八
二五七二

大正十四年十二月三十日印刷
大正十五年一月一日發行
一部定價金四十五錢
發行兼編輯人 京城府和泉町一六四 松本武正
印刷人 京城府和泉町一六四 石川利夫
印刷所 京城日報社
發行所 京城雜筆社 電話光化門三〇六

謹賀新年

土佐紙株式會社

京城支店

京城府南大門通二丁目

謹賀新年

土佐紙株式會社

京城支店

京城府南大門通二丁目

謹賀新年

京城株式現物取引市場

大阪朝日新聞京城支局

京城新聞

賀正 富田儀作

賀正 寺尾猛三郎

賀正 榎本隆

賀正 川端三次郎

賀正 濱吉太郎

賀正 福田有造

賀正 亥角仲藏

賀正 永見京造

賀正 小瀧元司

賀正 德野眞士

賀正　櫻井小一

賀正　森　悟一

賀正　伊藤利三郎

賀正　島原鐵三

賀正　西村宗一

賀正　松原純一

賀正　田口耕平

賀正　野田新吾

賀正　岸　巖

賀正　三戸萬象

謹賀新年

京城日日新聞
社長 有馬純吉

京城手形交換所
組合銀行

中央物産株式會社
京城府南大門市場
電話本局（長二一四一一六四一六八九）

賀正 川村喜一

賀正 馬野精一

賀正 大村卓一

賀正 澤村亮一

賀正 渡邊晋

賀正 中村誠

賀正 全南光州 白石甚吉

賀正 齋藤豊一

賀正 増田三穂

賀正 淺川伯教

恭賀新年

京城府南大門通鮮銀前

早川堂看板店

電話本局二四七六番

賀正 大村百藏

賀正 江原道春川 永松統治

賀正 河谷靜夫

賀正 濱井定

賀正 池田季雄

賀正 吉田直

賀正 中原守雄

賀正 小水眞二

賀正 岡村介石

賀正 岡正

恭賀新年

大正十五年一月元旦

大澤商會

眞木仙次郎

恭賀新年

大正十五年一月元旦

白井株式仲買店

白井友之助

恭賀新年

大正十五年一月元旦

和田外科病院

和田八千穗

恭賀新年

大正十五年一月元旦

京城酒商組合

恭賀新年

大正十五年一月元旦

京城府古市町

林　菅吉

恭賀新年

大正十五年一月元旦

京城醫師會

恭賀新年

大正十五年一月元旦

金剛山電氣
鐵道株式會社

恭賀新年

大正十五年一月元旦

京城明治町一丁目
小林藤右衛門

恭賀新年

大正十五年一月元旦

株式會社日本書籍商會
大須賀勝二

恭賀新年

大正十五年一月元旦

京城本町三丁目
近藤安吉

恭賀新年

大正十五月一月元旦

京城生命保險
同業會

恭賀新年

大正十五年一月元旦

京城府明治町一丁目
德力本店
京城出張所

賀正　時實秋穗

賀正　古城梅溪

賀正　前田昇

賀正　中川湊

賀正　大村友之亟

賀正　關口聰

賀正　堂本貞一

賀正　金谷要作

賀正　山本元光

賀正　吉村貫之（木浦）

賀正　仁川海岸町　桑野健治

賀正　仁川穀物協會　大平嘉重郎

賀正　仁川仲町　小林良藏

賀正　仁川松林里　茂木和三郎

賀正　仁川新町　堆浩

賀正　仁川商業會議所　岡本保誠

賀正　朝鮮每日新聞社　大島勝太郎

賀正　川井昌一

賀正　伊藤龍

賀正　石川久臣

賀正 有賀光豐

賀正 西崎鶴太郎

賀正 川添種一郎

賀正 矢鍋永三郎

賀正 高久敏男

賀正 今井武人

賀正 守屋德夫

賀正 山中大吉

賀正 大山一夫

賀正 松本光

賀正　平壤　宮川五郎三郎

賀正　平壤　松井民次郎

賀正　平壤　大橋恒藏

賀正　平壤　横田虎之助

賀正　鎭南浦　川本竹松

賀正　鎭南浦　重枝太索

賀正　全北裡里　佐々木久松

賀正　東京　志村四方一

賀正　咸北雄基港　鹽見峰治

賀正　群山明治町　秋山忠三郎

恭賀新年

大正十五年一月元旦

朝鮮土地經營株式會社

川畑俊雄

恭賀新年

大正十五年一月元旦

仁川米豆取引所

若松兎三郎

恭賀新年

大正十五年一月元旦

朝鮮教育用具株式會社

田川常次郎

恭賀新年

大正十五年一月元旦

京城本町二丁目

釘本金物店

恭賀新年

大正十五年一月元旦

鎭南浦三和町

重枝大漁組

恭賀新年

大正十五年一月元旦

平壤

平壤電氣株式會社

賀正 瀬戸潔

賀正 石橋滿

賀正 天日常次郎

賀正 飯泉幹太

賀正 恩田銅吉

賀正 井上收

賀正 大森富

賀正 中島司

賀正 廣江澤次郎

賀正 加藤松林

謹賀新年

朝鮮經濟日報
社長 小野久太郎

大阪毎日新聞
京城支局

朝鮮警察新聞
社長 神阪退三

謹賀新年

朝鮮火災海上
保險株式會社

東洋拓殖株式會社
京城支店

古河電氣工業株式會社
京城出張所

賀正　青柳綱大郎

賀正　渡邊彌幸

賀正　有馬純吉

賀正　古田謙三郎

賀正　古宇田巖

賀正　田中守寛

賀正　菊池謙讓

賀正　大原胤夫

賀正　水谷九二吉

賀正　木村文三郎

賀正　進辰馬

賀正　堀内満輔

賀正　藤井寛太郎

賀正　澤村九平

賀正　鈴木文次郎

賀正　富田徹三

賀正　芥川正

賀正　岩間元二郎

賀正　森六治

賀正　田村直一

正賀

京城電氣
株式會社

正賀

不二興業
株式會社

謹賀新年

大正十五年一月元旦

三井物産株式會社

京城支店

謹賀新年

大正十五年一月元旦

鎭南浦電氣株式會社

電話一〇番

賀正　井内勇

賀正　宮部敬治

賀正　丸山幹治

賀正　澤村亮一

賀正　中村健太郎

賀正　今村鞆

賀正　平山政十

賀正　細井肇

賀正　別府八百吉

賀正　清谷惠眼

謹賀新年

朝鮮商工新聞
社長 齋藤五吉

朝鮮郵船
株式會社

大陸通信社
社長 菊池謙讓

謹賀新年

謹賀新年

舊年中は格別の御愛顧御引立に預り難有奉拜謝候御餞に依り昨年上下兩半季共當市場取扱高に於て最高實相受け候事偏に御厚庇の賜と厚く御禮申上候尚本年も不相變倍舊御引立御用命の程奉希上候

大阪竹原商店朝鮮總特約店
京城現株取引市場仲買人
新田耕市商店
京城黄金町二丁目
電話長五七〇、一九六番
自宅櫻井町一丁目

京城南大門通二丁目
賀正 朝明舍

謹賀新年
大正十五年元旦
京城西四軒町
南山莊

京畿日報

毎日申報

歳暮の御贈物にも
正月の御仕度にも
時世に適つた
銘仙と毛糸
京城本町
秩
ちゝ嫁や
電話本局五〇五五〇六長八九〇

京城雜筆（第八十三號）
大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年一月一日發行（毎月一回一日發行）